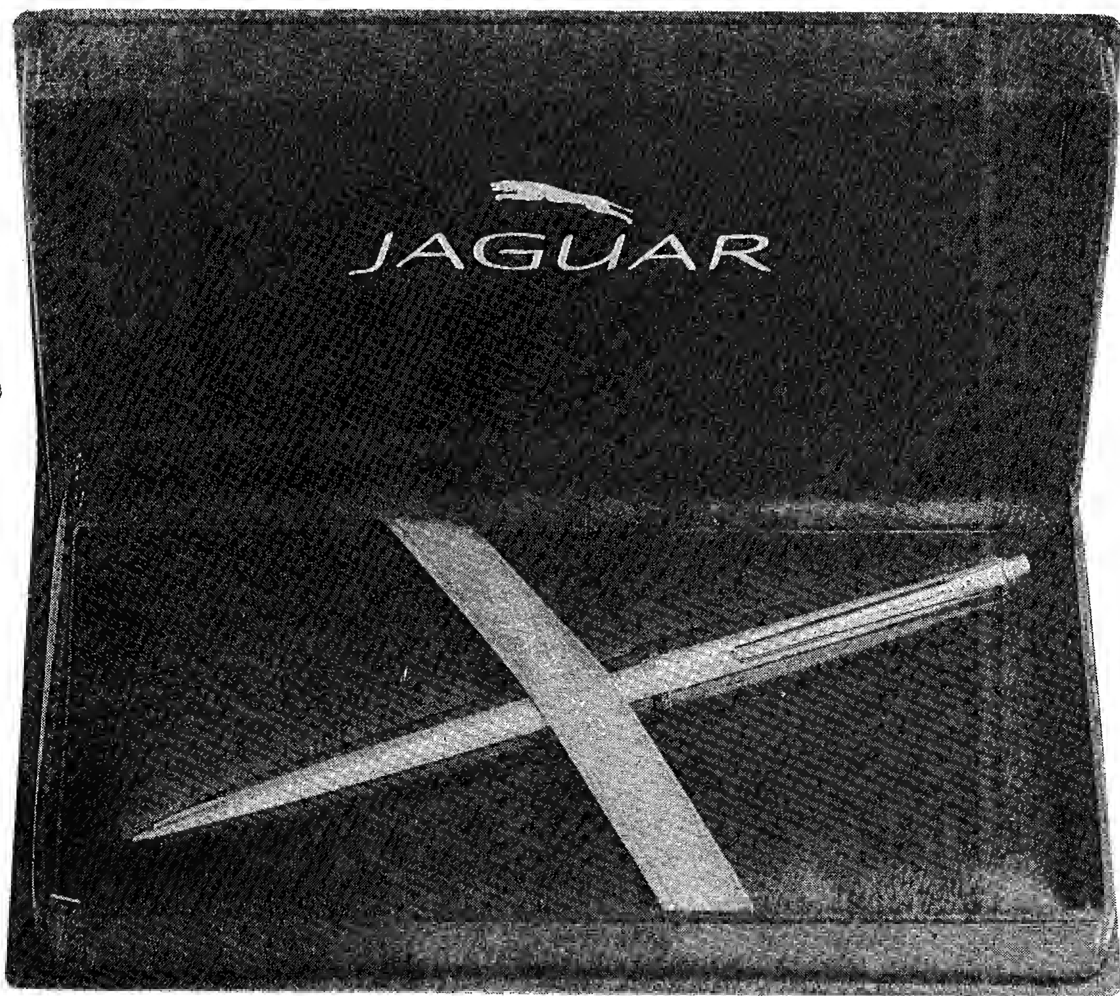


精かんなきみから
精かんな かれへ**贈りものはジャガー**

胸から出す、ノックする、書く………
三菱ボールペン《ジャガー》は、すべてに
スキがありません。
スマートなデザイン、軽快なキャップ
スライド、ムラのない書き味《ジャガー》
は、行動的な若いあなたに、ぴったりです

精悍なヤツ――――

ジャガー

三菱ボールペン

¥2000・¥1000・¥800・¥500

"ミュンヘン"への道

訪欧の旅から最近帰国された安藤純光氏（日本協会常務理事）が、かの地のハンドボール界でいちばん驚ろいたのは各国がすでにミュンヘンオリンピックまでの長期強化計画を綿密に立案し、しかも、一分のスキと狂いもなくそれを実行に移していることだったという。

なかでも、ルーマニア協会の重厚な強化プランは、ミュンヘンまでの千余日を一日刻みにして、いつどこで何をやる、来年の今日はここまで計画を進めておくといった細い点まで示されているそうだ。

ミュンヘン・オリンピックがハンドボール人にとって実に36年ぶりに訪れた好機であることは、すでに各所で説かれているのだが、それをヨーロッパ各国はごくあたりまえのこととして長期的な選手強化策をねりあげているのだろう。

日本の場合、当面の目標は来春の世界選手権におかれ、ミュンヘン対策はそのあとといった感じが強い。

世界選手権もミュンヘンへの一過程にはちがいないのだが、ヨーロッパの活動を知らされると心細い。

特にムードの盛りあがり—挙国的な体制の確立は急務である。

日本協会はルーマニアで合宿中の全日本男子が帰国後、いくつかのミュンヘン対策を打ち出すようだが、問題の成否は、国内における"協力"にあろう。

斯界はこれまで大事業を起こすたびになんらかのトラブルを招いている。その原因は、いたずらに私情が作用しているからだ。

すでに世界選手権基金の全国運動、ナショナルチームの国内転戦など新しい構想の一部が表明されているが、日本協会が地方協会の信頼にたる行動を示すかどうかが成功のカギだという声がある。

協会・球界自体が強く固まっていずして、なんで強力な代表チームが育てられよう。

率直にいってプレイヤーたちの燃えあがるような意欲に比して、日本協会、地方協会指導者たちの感覚は旧態とさして変わらない。夢にまでみたオリンピックへの道を自ら遠く長くしてしまうような愚は許されないことだ。 （杉山）

【この欄への投稿を歓迎します。字数は800字厳守】

時評

日本協会では5月の定例常務理事会で、来年度以降の全日本大会再検討のため小委員会を編成することを申し合わせた。

具体的な動きにについては次回に持ちこされたが小委員会という特別スタッフを設けて、そこで検討を進めるという姿勢に注目されるものがある。

先に、専門パートが6委員会に縮少され、一部には球界活動の停滞につながるのではないかという不安の声もあったようだが、田村会長は、大課題に直面した時は、"専門"という囲いをはずして、多くの人間が意見を持ち寄って解決の道を選ぶと述べていた。その第一弾とみてもよい。

"全日本選手権検討委員会"ともいうべきスタッフは、常務理事陣から数名のほか、組織、加盟団体の代表も加えられて構成されるようだが、成果は今から充分に期待できよう。

日本協会は「外の声」を聞く姿勢に欠けている。

特に本部役員にそれが云えるといったら暴言になろうか。

第三者の提言はもとより、地方関係者、"現場"指導者、プレイヤーなどの意見を吸いあげようとする態度は無に等しい。

田村新体制が、過去のそうした幣を取り除くための一手段として多彩な人材による小委員会システムを積極的に推進していこうとするのはよいことだ。

ところで、全国大会の整理というのはどのような形で進められるのだろうか。

現在、球界には六つの全日本選手権があるが、このうち全日本学生、全日本高校、全日本教職員、全日本実業団の4大会は日本協会が主催とはいうものの、実質的には各加盟団体の年間最大事業である。日本協会が手をつけるのはムリな話で、大会々期について注文するに留るだろう。（全日本高校、全日本教職員の8月開催は動かし難い）

課題は最高峰・全日本総合に各大会をどう結びつけるかであり、それによって全日本選抜の時期などが考りよされよう。

また、是非研究して欲しいのは、国体一般の部の参加規定である。近い将来、大巾な改訂が行われると伝えられる国体だが、なんとかクラブチームの活路とするような策はねれないものだろうか。実連が主唱する日本リーグについても、日本協会はもうそろそろ、その見解を公けにすべきだと思う。 （S）

「ハンドボール」6月号（第65号）目次

表紙写真
関東学生春季リーグ
日体大—中央大戦
（5月9日）

1人10円(内定)の全国募金運動

～世界選手権基金、実現へ～

初年度の目標額・百五十万円

本誌既報のとおり、日本協会常務理事会(合議スタッフ)では、世界選手権派遣費の一助として、一人10円を単位とした全国的な募金運動を行うことになり、具体案の作成にとりかかった。早ければ7月1日を期して実施に移す予定である。

世界選手権をはじめ海外派遣については、航空費など一回の遠征について一千万円近い経費が必要で、全額の国庫補助は現段階ではとうてい望めずとあって、斯界ではそのつど代表に選ばれた選手の個人負担で補って来たが、この方法はともすれば、優秀な技術を持ちながら、経済的条件のため出場を断念したり、辞退するケースがみられ一日も早い改善策が打ち出されるよう各方面から要望されていたものである。田村新体制の最初の事業としてこの問題に焦点があてられ、永年の懸案に曙光を見出せるようになったわけで、その成果が期待される。

なお、この運動は来春の第7回世界男子7人制選手権大会だけのものではなく、今後、当分のあいだ継続することになる。

今回の運動の提唱者は田村正衛会長で、氏自身が以前から抱いていた構想の実現といってよい。

正式に、合議スタッフに提示されたのは、この問題のために臨時招集された4月18日の常務理事会(東京・本誌前号参照)で、各役員も基本的に、この運動に賛同し、つづいて5月8日の月例常務理事会(東京)席上、具体的な実施案について検討が加えられた。

すでに、4月18日の段階で田村会長案と同会長から指示をうけていた総務委員会案(岡村常務理事担当)が提出されており、その両者をつきあわせた第二次案が5月8日の会合で渡辺副会長(財務担当)から発表されている。

それによると、日本協会の中に募金活動のための委員会を設け、「同委員会規定」を制定し、この規定にそって、全国的な運動を展開しようというものである。

委員会は

一、選手及び各チーム役員による募金

二、全国大会出場チーム及び役員による募金

三、日本協会、各地方協会、各加盟団体役員による賛助金

四、資金調達事業の開催

を主に、募金を行うことになっている。

前述の各項目別の実施プランは次のとおりである。

【選手及び各チーム役員による募金】この運動の主軸となる。各地方協会などで行われるあらゆる公式大会を対象に、その出場チームの選手と大会役員全員から徴収するもので、高校生は「全日本高校選手権各都道府県予選大会」と「各都道府県新人大会」の2大会に限定する。(注・高校生が総合大会などに出た場合については研究中)

学生、一般はエントリーのたびに大会主催者に払いこむことになる。金額は一人10円に内定

【全国大会出場チーム及び役員による募金】全日本学生選手権、全日本実業団選手権、全日本総合選手権、全日本教職員選手権、全日本総合選手権出場の各チームからチーム単位で徴収する。国体と全日本高校は除く意向。金額は一チーム100円に内定。

また、4大会の役員から一人一口10円の募金を行う。

【日本協会など役員による賛助金】全国評議員から賛助金の寄附を求めるもので、詳細については田村会長、西、保坂、渡辺副会長らで検討。

【資金調達事業の開催】例えば「世界選手権派遣資金募集試合」の開催などをさすもので、12月の全日本選抜大会の純益を全額これにあてるといった案も出されている。いずれにせよ、競技収入が、その主たるものになる。

こうして集められた〝浄財〟はあらかじめ大会又は各組織、加盟団体ごとに選任さた募金委員によって、本部(日本協会募金委員会＝仮称)におくられることになる。

日本協会では、岡村常務理事が草案の作成を急いでおり、6月中には全国評議員会、同理事会などの承認をとりつける予定だが、田村会長ら首悩陣は、6・7月中に各ブロックを巡訪し、各地関係者と会って、この運動の趣旨を説明するとともに全面的な協力を要請することにしている。

× × ×

【解説】財源の確保が斯界の消長を握るものだ、とは、極端にいうならば日本協会創立の時からいいつづけられて来たことだ。

そのために、いろいろな努力がなされても来たのだが、恒久的な対策は得られずじまいだった。

特に、海外遠征に関しては、個人負担を強制せざるを得ず、代表選手たちは、金策にかけずり廻らねばならぬ状態で、集る選手はそれでもよかったが、メドが立たず代表を断念する者も出て批判の的になったこともあった。

日本体育協会からはハンドボールのように3年に1回開かれる世界選手権に出場の全日本代表には原則として一人当たり航空費の三分の二が支払はれるが三分の一はどうしても日本協会なり当人が捻出しなければならない。

競技収入(放送権料などを含めて)のあがる競技団体は協会がその穴埋めをしているようだが普及したといっても、ハンドボールの場合は、大会必要経費を埋める程度の収入しか得られずその台所は苦しいのが現状である。

今回の募金運動は、その不備を少しでもカバーするために、田村

会長が強く実現を主張したもので本誌前号でも伝えられたとおり、代表選手への"挙国意識"も高まり、結構な企画だと思う。

一部には、大会のたびに10円集めるとは……といった声も聞かれるが、ていさいにこだわってはいられぬというのが実情だ。

成功するだろうかという疑問よりも、成功させなければならないという"切迫感"さえ強い。

田村会長は『年額150万円が目標だ』という。目算どおり集まれば遠征総経費の三分の一に近い300万円という金額が2年間で積み立てられる勘定だ。

皮算用をしてみよう。

高校大会の場合、全国に男女一千チーム。その八割は全日本高校選手権大会の予選に出場するであろうか一チーム15人として計十二万円(800チーム×15人×10円)。新人大会は7割が出場するとみて計十万五千円(700チーム×15人×10円)。学生大会は今春のリーグ戦の出場校を例にとると7学連合計114校が参加。各チーム15人それに役員を加え約2万円。春秋で4万円となる。一般大会は実体がつかみにくいが、47都道府県協会で最低2回は県内大会を開催しているようである。各回10チーム各15人として「47協会×10チーム×15人×10円×2(春秋)」の計算が考えられる。十四万一千円だ。

全国大会におけるチーム単位の募金は、昨年の各大会を例にとると全日本学生44、同実業団38、同教職員21、同総合44で(いずれも男女)延べ147チームとなる。それに百円を乗ずると一万四千七百円

このほか役員による総収入を五万円(延べ五千人)と推定すればここまで総計は約47万円となる。

目標額の31パーセント。残りは賛助金と競技収入にたよることになるわけだ。

賛助金は各評議員(定数51)から一律一万円程度という。

● 競技収入で60万円があれば一応目的のラインには近づくことができるわけだが、それだけの収益を目的とした大会をはたして開くことができるかどうか。一つのポイントになって来る。

12月の全日本選抜はトップレベルの激突で、大会後半は多くのファンを動員しており、運営面をもうすこしうまくすれば、かなりの金額を期待できよう。

このほか、日本協会主催による特別カード(試合)を編成することが考えられるが、そのための経費を推定すると、多額なプラスは望めない。

これまでの例だと、国際試合がかなりの実績をあげているようで、外国チームを招待して、基金集めをすることは、当然企画されてよいことだろう。

これらの構想を、実現するには地方協会の全面的な協力がなければ果たすことができないのは、他言を要すまい。

しかし、卒直にいって、ここ数年、地方組織の"中央"に対する信頼度は必しも高くない。

田村会長ら首脳陣は6月8日の東海ブロック関係者とのこん談会を皮切りに、全国各地を巡訪してこの募金運動を中心とした施政の理解に努めるというが、たしかにそれは必要なことであろう。

もう一つの問題は、その集金方法だ。ただでさえ、雑務の多い役員にこれ以上負担をかけるのはという心配の声もすでに一部にはおこっている。

運動の理念・趣旨に異論はないだろうが、運用・実施面ではまだまだ研究の余地が残されており、体協の"スポーツ(10円)募金"とのかねあいも課題あでる。全国理事会などで慎重な打ち合せが望まれる。(S)

炎天下、屋外で猛練習

★ルーマニアから第1信

ルーマニアで合宿中の全日本男子から、編集部あて第1信がとどけられた。

× × ×

ルーマニアは毎日30度をこす暑さで、しかも屋外での練習のため選手たちは、まっ黒に陽やけしている。気温の変化が著しく38度の日もあれば、15度の時もあり、体調のコントロールが難しい。しかし全員元気いっぱい。

練習は、ルーマニア協会コーチニコライ・ネデフ氏(注・昨秋大崎電気の招待で来日)がたてたプランにそって進められており、激しく、きつい内容だ。かってルーマニア・ナショナルチームで活躍していた選手が、つねに二、三人指導に来てくれている。

攻撃のコンビネーションはかなりまとまり、ディフェンスもよい方向に進んでいると思う。

ルーマニア協会は非常に好意的で、こちらが希望さえすれば、国内1部リーグのクラブと試合を組んでくれるという。練習の過程をみて、対戦したいと思っている。6月17、18日にはルーマニア・ナショナルBと、24、25日には同Aと親善試合を行う予定。

中国選出新理事に 辻一義氏

中国地区選出の日本協会理事はこのほど藤田信義氏(山口協会副会長)から辻一義氏(岡山協会理事)に変更された。

「紙上討論」を新設

本誌では斯界発展のため広い層から建設的な意見を募ることにし、紙上討論の場を設けます。

毎回テーマを決め、読者各位から寄稿を発表するものです。奮って御執筆下さい。

第1回のテーマと要領は次のとおりです。

テーマ『クラブチームをいかに育成するか』

かって球界を支えていたクラブチームは年毎にその活動が縮少されていますが、斯界の底辺としてその根を絶やすことは"危機"にもつながる大問題です。

「クラブの活きる道として日本協会に何を望むか」「私達はクラブをこのように運営している」「クラブ育成のための構想」といった内容の御意見をお寄せ下さい。

〆切り 7月10日。日本ハンドボール協会編集部必着
字数 四〇〇字以上千六百字以内。
発表 本誌8月号

読者各位

日本ハンドボール協会編集部
(東京都渋谷区神南町25 〒一五〇)

全日本男子が国内サーキット

9月上旬に熊本などで5試合



日本協会と強化対策委では、今秋初の試みとして、全日本男子ナショナルチームの国内サーキット（各地巡回試合）を行うことを決め、各地関係者と折しようを進めていたが、このほどその日程が別表のように内定した。

全日本男子
国内サーキット日程（予定）

①	9月3日(水)	全熊本	（熊本市）
②	4日(木)	全山口	（徳山市）
③	5日(金)	全大阪	（大阪市）
④	7日(日)	全京都	（京都市）
⑤	8日(月)	氷見ク	（高岡市）

この試合は来春の世界選手権に備える全日本男子が、実戦訓れんと、その実力を全国各地の関係者とファンに披露するために行われるもので全日本男子は、8月末に発表される世界選手権第3次候補選手を中心に編成、対戦相手は地元の選抜チームがつとめる予定。

内定した日程によると、9月3日、熊本市で全熊本との試合を第1戦に9月8日高岡市での氷見クラブ戦まで7日間に5試合となっている。

西から順に廻るとはいえかなり強行な旅程だが、これは世界選手権が、フランスの各都市を転戦して開かれることに備える意味も含まれている。

全日本男子は、現在訪欧中の第2次候補が、4月22日大阪で大阪イーグルスと対戦しており（本誌既報＝写真）成果をあげたが、9月の国内サーキットも各地で盛況のうち進められることを期待したい。

この日程のほか、11月中旬と1月下旬に東京で関東学生選抜と、2月中旬に名古屋で実業団関係のチームと対戦のプランがあり、1月下旬と2月中旬の全日本は世界選手権代表チームになる予定だ。

【写真は4月22日大阪で行われた全日本対大阪イーグルス戦。全日本・飯田の豪快な攻撃（光島磯雄氏撮影）】

世界選手権代表は14名（予定）

日本協会では、5月8日の定例常務理事会で来春の第7回世界男子7人制選手権に出場する全日本チームの人員（選手）を14名とすることに内定した。

GKとFPの内訳けなどについて未定だが、代表選手は12月16日から東京で開かれる第16回全日本選抜選手権大会の最終日（閉会式）に発表される予定である。

なお、選手の選考にあたっては選考委員会を特別編成し、選考委員の顔ぶれは7月末までに人選される。

選考委員は8月20日までに全日本強化選手（全日本B）に新しく加える選手を選考するほか、8月末に発表される世界選手権第3次候補（新しい全日本A）の選考にもあたる。

来春までに5回の合宿

選手強化対策委では、ルーマニア遠征後の全日本男子国内合宿の日程を一部手なおしし、5月8日の月例常務理事会で承認をうけた。

それによると、帰国後から来春までに6回の合宿を行う予定だったが（本誌既報）、5回に変更し日どりも修正された。

▽第5次　8月26日～29日　東京
▽第6次　11月11日～16日　東京
▽第7次　12月22日～26日　横浜
▽第8次　45年1月20日～25日　東京
▽第9次　2月3日～11日　東京

第5次合宿は予定どおり全日本第2次候補（渡欧中）と全日本強化選手（全日本B）の合同で行われる。

球技の参加国縮少説 オリンピック

アマチュア論議など、このところ世界スポーツ界——特にIOC（国際オリンピック委）周辺は数々の問題がうず巻いているが、ルリンピックの規模縮少の手段として、ボールゲームの参加国をすべて8ケ国以内におさえては、という意見が一部に流れている。

それを裏付けるように5月23日UPI＝共同電として各報道機関が伝えるところによるとソビエトオリンピック委員会のアンドリアーフ会長は「ソビエッキー・スポルト」紙上で「ハンドボールなどボールゲームの縮少」を提唱しているという。

現在、オリンピックのボールゲームは16ケ国以内に限定され、一九七二年のミュンヘンオリンピックのハンドボールも当然、この線で実施されるだろうが、もし、縮少ムードが支配的になると、日本ハンドボール界も安閑としてはいられない。

16から8へと減らされれば、ミュンヘンへの道は、ますます狭くなるわけだ。

6月6日からワルシャワで開かれる第68回IOC総会でこの問題が果して論議されるかどうか、また、ミュンヘンにおける女子ハンドボールの採否が再び検討されるだろう。

国際試合展望

・タスマジヤン杯
・日韓学生

ルーマニアで強化合宿中の全日本チームは6月29日からベオグラードで開かれるタスマジヤン・カップ国際トーナメントに出場。一方、全日本学生代表チーム（6月2日に決定戦）は6月下旬、韓国を訪問、3度目の交流を行う。
二つの国際試合を展望してみよう。

【タスマジヤン・カップ争奪国際トーナメント】各国チャンピオンチームによるヨーロッパ・カップトーナメント(注・今年は流会)を頂点に、ヨーロッパにはいくつもの国際大会があるが、タ杯は東ドイツのニューイヤートーナメントと並ぶ由緒あるものの一つだ。10年前からユーゴ協会が主催し、毎年各国のナショナルチームを招待、IHF筋でも深い関心を示しているのだが、今回はじめてヨーロッパ地域外からゲストチームを招くことになり日本が選ばれた。

今回の出場国は日本のほかソビエト、フランス、ルーマニアそれに地元ユーゴが恒例によってナショナルプレイヤーをA・Bに分け合せて5ケ国6チームと発表されている。

昨年までは、三ケ国づつ二組の予選リーグのあと同位者の対戦によって決勝と順位決定戦が行われていたが、今年は総当りという声も聞こえている。（場合によってはユーゴは1チーム＝5月25日現在、試合方法組み合せなど未着）

日本が世界選手権大会以外の国際公式大会に参加するのは今回が初めてで、その成果が期待されるわけだが、なによりも注目されるのは、来春の世界選手権予選リーグB組で対戦が八分通り固いユーゴと手合せすることだ（ユーゴは11月、スペインと予選を戦う）

帰国後、本番への策戦を検討することができるのは幸運であり、日本チームは簡易ビデオテープまで携行して万全を期している。

ユーゴをはじめ各国のメンバーはおそらく別表から主力を選抜してくるだろう。

今シーズンの成績で推すと、フランストーナメントで快勝したルーマニアが優勝候補の一番手にあげられ、トビリシトーナメント優勝のソビエトがベストメンバーを派遣してくれれば、対抗となろう。

ヨーロッパでは圧倒的にホスト国が強さを示すだけに、ユーゴにもチャンスはある。

卒直にいってフランスと日本は苦しい。日本としては前述のような理由でユーゴ戦に焦点をあてるだろうが、ルーマニアで1ケ月以上の合宿をしたあとであり、ベスト・コンディションはとうてい望めない。村田監督も『あくまで偵察戦』と割切って出発している。

【日韓大学交流】日本代表も決まっていず、韓国5都市で5〜7試合という程度の情報だけなため展望もあくまで推測にすぎない。

これまで両国の学生界は別表のように交流しているのだが、日体大の記録は、11人制であり、7人制の記録も6年前のものだ。この間に韓国の実力はかなり引きあげられているとみなければなるまい。もともと、韓国はサッカー、バスケットボールなどボールゲームに力を入れており、選手のセンスもすばらしい。単独チームなら日本の東西一部校の実力は備えているとみてさしつかえないだろう。

日本側は、春季リーグを終えたあとで調子の波は下降気味。コンディショニングも成績を左右する一つのポイントだ。

〝親善・交歓〟が第一義なことはもちろんだが、オリンピック前にアジア予選が行われるとなれば、盟友即ちライバルである。

韓国ハンドボール界の実力を知る絶好の機会だけに、日本代表の成果をみまもりたい。（杉山）

日韓大学交流 これまでの成績

【日体大男子訪韓・昭36】		
日体	22—7	慶熙大
日体	22—6	成均館大
日体	18—4	大邱学生選抜
日体	21—10	延世大
日体	21—8	光州師範大
〜以上11人制〜		
【韓国学生選抜来日・昭38】		
全東海学生	21—14	韓国学生
日体	25(分)25	韓国学生
全関東学生	19—9	韓国学生
桃山学院	30—22	韓国学生
韓国学生	19—17	広島商大
▽参考		
韓国学生	24—18	下松ク（山口）
韓国学生	29—19	徳山ク（山口）
〜以上7人制〜（室内）〜		

予想される各国の顔ぶれ

【日　本】
- GK 福本（大崎電気）、下里（〃）、本田（日体大）
- FP 竹野（大崎電気）、井上（〃）、近藤（〃）、近森（〃）、飯田（〃）、東（〃）、平岡（〃）、木野（ワクナガ）、早川（〃）、北井（埼玉教員）、野田（大同製綱）、藤中（日体大）、有永（立教大）、中井（同志社大）

【ユーゴ】
- GK コスティク、シヴコヴィク、メルバル
- FP ホルバト、ポクラヤク、プリバニク、フアフリク、カラリク、ラブルニク、ザグメスター、ペジク、ヴィドヴィツク、ポポビク、ミスコビク、ドラジセビク

【ルーマニア】
- GK ペヌ、オルバン
- FP オテリア、マリネスク、グネス、コアサ、パプ、パラスチフ、モルドバン、サムンギ、ニカ、グルイア、ガツ

【ソビエト】
- GK ヴイルソン、イチエンコ、シスチエリー
- FP ソロムコ、マシヨリン、コゴウチヨフ、マキシモフ、クリモフ、フクハカーゼ、カイコク、グルビズ、ズドレンコ

【フランス】
- GK セレント、フエリナク
- FP R・リカルド、M・リカルド、ブルネット、モーシェル、C・リラルジエ、ドリユアイス、ゲルマイン、ガランド、マック、オルシニ、タイレフェル、ニタ、テリエール、エチエベリ、ファイエ

近づくＩＨＦ審判講習会

国際的に〝思想〟を統一

日本から 山田 計氏

この7月にスペインのマドリッドで国際審判員講習会が開かれ、日本からは山田計理事が出席することになっている。(本誌既報)

この講習会はすでに15回を数えている。今回は16回という訳である。ＩＨＦの主催する国際会議は総会とこの国際審判員講習会である。

総会は西歴の偶数年に行なわれ、国際審判員講習会は奇数年に行なわれることになっている。

この国際審判員講習会はＩＨＦの競技委員会が主管しており、2年毎にヨーロッパ各地で行なわれている。

前回はルーマニア協会が協力をして、ポイアナ・ブラソフで1967年の8月6日から12日という長期間に行なっている。従来は3～4日というのが普通であったが、前回は1週間という長期間のものとなり、内容も豊富になっている。

いったい、国際審判員講習会とはどのようなことを行なうものか前回の例をひきながら説明さしていこう。(藤本)

前回の出席者はＩＨＦ関係では競技委員長エミール・ホルル(スイス)、競技委員アクセル・アーン(デンマーク)、マリヤン・フランダー(ユーゴースラビア)、イオン・クンスト(ルーマニア)、ジーグフリード・ペライ(西ドイツ)、クルト・ワドマーク(スウェーデン)の6氏、ＩＨＦの理事マックス・リンケンバーガー(西ドイツ)、ヘルマン・ミリュース(東ドイツ)、イストバン・マダラス(ハンガリー)の3氏が出席し、各国からはブルガリア2人、デンマーク2人、西ドイツ2人、東ドイツ2人、フィンランド2人フランス1人、オランダ2人、イスラエル2人、イタリー1人、ユーゴースラビア2人、ノルウェー2人、オーストリー2人、ポーランド4人、スウェーデン2人、スイス3人、ソ連2人、スペイン3人、チェコ2人、チコニジアー1人、ハンガリー2人、ルーマニア12人の計53人が参加している。

▽8月6日にポイアナ、ブラソフに集った参加者は次のような日程で講習を受けた。

▽8月7日 開会宣言

現代ハンドボールをどのように把握するか……

エミール・ホルル氏

技術・戦術の重要な問題点に関して実地指導…イオン・クンスト(ステアウア・ブカレストクラブが協力)

▽8月8日国際トーナメント(第1日)

試合中におけるチーム管理

……クルト・ワドマーク

技術・戦術に関して重要な問題点の実地指導……イオン・クンスト(ステアウア・ブカレスト協力)

▽8月8日＝国際トーナメント(第二日)

映画1967年ヨーロッパカップ決勝戦――ｖｆレグンメルスバッハ対デュクラ・プラーグ

▽8月9日

レフェリーは職業でなく、より使命感をもったものでなくはならない…… エミール・ホルル

技術・戦術指導……イオン・クンスト(ステアウア・ブカレスト協力)

▽8月10日＝国際トーナメント(第3日)

ブラン城とリスノブ山エクスカーション、ブラソフ市見学

ブラソフ市での親善試合

8月11日

ルールについての質疑応答ならびに討論

国際トーナメント閉会

▽8月12日

プラホバ湖、プレデアル、シナイアエクスカーション

ブカレストに行き、終了のパーティ

▽8月13日解散

以上のような日程であった。

× × ×

エミール・ホルル氏の二つの講演は現代のハンドボール概括とハンドボールはいかにあるべきかを問題にしたものと、レフェリーとはいかにあるべきか―特にその責任の所在を明らかにしようとするものであった。

どちらも、ハンドボールはいかにあるべきか、それを基礎としてレフェリーはいかにあるべきかという根本的な原理をついた講演で氏独特の細かい例をひきながら、本質に肉迫していくという内容であった。

前回の大きな特色は何といっても複審制という大きな課題をかかえての講習会であったということである。

そのために、レフェリーの練習台として、いつもの時なら、国内のよせ集め的なチームが用意されているのに、前回では、国際トーナメントには、男子では、ブカレストジュニア選抜、ブカレスト少年選抜、それに東ドイツからのディナモ・ベルリン、スウェーデンからのヘラス・ストックホルム、女子では、ブカレスト選抜、ブカレストジュニア選抜、ブカレスト少女選抜、東ドイツから、ＳＫ・ライプチッヒという一流チームを集め、レフェリーのレベルを一挙にあげようという試みがなされたことであった。

更に10日、11日には、西ドイツからフェニックス・エッセンを招き、国際トーナメントをこの大会の中で行なうという漸新なアイデアをもりこむとともに、トップチーム相手にレフェリーの技術の研修を図るという形がとられた。

7日の試合は単審制で、前後半を2人のレフェリーがそれぞれ1人ずつ担当するという形がとられたが、8日、9日は前半に2人、後半に2人のレフェリーが担当をもち複審制で試合が進められ、複審制の特質を参加者全員に身をもって体験させるとともにＩＨＦ競技委員会の進むべき方向へのデータ集めがなされた。

10日の親善試合は複審制、11日には15分のゲームを12試合行ない、単審、複審をとりあわせて、レフェリーを担当させ、それぞれに批評を加えた。

この複審制の問題とともに、ルール上特に問題となる点については、ステアウア・ブカレストという超一流チームの協力を得て、イオン・クンスト氏が懇切なる指導を行なっている。

この時にはポスト・プレーヤーのラインクロスの問題、ブロック

の問題、7mスローの問題、競技遅延の問題が同チームのもつ高度な技術・戦術を例にとって、指導されている。

選手のプレーは年々高度に高度に成長しているのに、審判技術は一こうに伸びないというのは国内でも良く聞くことであるが、ヨーロッパでも審判のほうにたちおくれがあるといわれている。それを一歩でも前進させようとし、超一流チームのプレーヤーを使ってのコーチを行なうなど、IHFも大いにこの問題に関心をもっていることがうかがわれる。

クルト・ワドマーク氏の講演は主として選手の交替についてのべられているもので、一チームの構成というようなものにまで言及され、フィールドプレーヤー、ゴールキーパーの両者について、考えをのべている。

以上のように、今日大きな問題をかかえている競技委員会だけに前回はなかなか積極的な方針によって、この講習会を成功裡のうちにおわらしている。

以上に述べたことが、所と時が変ると多少の変化はあるが、いつもこの講習会が行なわれている形である。

前回は複審制にきりかわることが予想されていた時期だけに、この問題が大きくクローズ・アップされていたが、この7月に開かれる講習会でも、最重要なのは複審制の問題であろう。

複審制のルール制定後はじめての講習会だけに、各国がもっている複審制に関する疑問点、問題点が数多くでてくることが予想される。

それにエリア・ライン附近の攻撃側、防禦側のトラブル、競技遅延の問題と多くの懸案事項が山積しているだけに、それをいかに競技委員会が考えているか。はっきり示されることが望まれる。

より高度の審判技術の達成のため、IHFでも一生懸命なのであるし、我々もより高度なものをめざさねばならない。

基本的な問題―審判というものに対してどう考えているか、これが第一の問題になろう。審判がルールに対して統一解釈をもち、その後にある考え方に共通理解が及んだ時に、はじめて、思想統一ということが可能になろう。

根本的な問題の解決なしにはより大きな進歩は望みようもないのである。

現象面を追いかけるのに忙がしく、もつとより根源的なものがなおざりにされてはならないと思う

× × ×

なお、この講習会に日本から出席するのは2回目で、会終了後には、参加者全員に国際審判員のライセンスが与えられる予定だ。

ちなみに、現在、日本で国際審判員のライセンスを持っているのは松本重雄、若崎重富、藤本強の3氏である（一九六七年四月、IHF発表のリストによる）

海外トピックス

ステラ、決勝で敗る

今年のフランス男子（1部）選手権は、昨年10月から4地域で行われていたブロック・リーグの勝者4チームによってトーナメントで争われ、昭和39年来日して日本のファンにもなじみ深いステラクラブ（パリ）とステード・マルセイユ・UCが勝ち残った。

両者の決勝は4月26日ビザンソンで行われ19—16でステード・MUCが快勝、第17代チャンピオンチームになった。

ステラは今年勝てば2年連続栄冠を飾るところだった。

F・Aギヨッピンゲンのジュニア養成

FA・ギヨッピンゲンと云えば世界に広く名前を知られている西ドイツ南部のギョッピンゲンの町のクラブであることはご存じの筈である。

西ドイツの選手権をとり、またヨーロッパカップでは輝やかしい二連覇という偉業をなくとげているクラブである。

同チームは国内リーグで活躍するトップレベルのプレーヤーの技術・戦術の向上だけでなく、次代をになう戦力の養成にも力を注いである。西ドイツのジュニアにはいくつかの年令別の大会があり、ここで良い成績をあげ、将来の大選手になるべく、多くのジュニアが練習にはげんでいる。

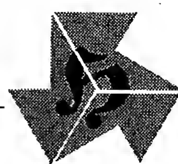
指導者も充分にどのようにしてジュニアを強化していくか研究し適切な指導を行ない、着々と成果をあげている。

11才にしてすでに7年に球歴をもっているというように、初年時代からボールを扱っているジュニア選手が何人もいるし、ギョッピンゲンの一流選手たちがコーチをするというめぐまれた環境にあるので、これらのジュニア選手達はすくすくと育っていくことであろう。

グンメルスバッハ、米・加へ

西ドイツ最強のグンメルスバッハ・クラブがこのほどアメリカ、カナダ遠征を行った。

アメリカ、カナダ両協会がタイアップして同チームを招いたと伝えられ、両国がハンドボールに熱意を示しはじめた一つの動きとして注目されよう。



高体連、20周年を迎う ③

10周年（第10回・昭34）記念大会で初優勝を飾った男・中京商（愛知、現中京高）は、この栄光をキッカケとして黄金時代を築くことに成功した。第12回（昭36）大会までの全日本3連ぱ。35年は国体でも優勝している。

中京商を激しく追いあげたのはほかならぬ桜台高（愛知）である34年の県予選以来、愛知県内における両者の立ち場は完全に逆転した。同時にそれは、全日本における王者交代をも意味した。名門の意地にかけても桜台高は中京商から王座を奪還しなければならなかった。

両校は、35、36年の2年間、県大会、名古屋市大会などで激しく対決した。全日本の決勝ともいえるカードがなんどとなくくり返され地元ファンを湧かせた。王国・愛知の球史のなかでも、この頃はいちだんと華やかな時期であろう。

35年（倉敷市）。中京商は明石高（兵庫）、塩山高（山梨）、熊本市商らを、桜台高は神代高（東京）、寝屋川高（大阪）などを降して決勝へ進んだ。

8―8から決勝史上2度目の延長となり、前半桜台が3―2（11―10）とリードしたが、中京商は後半、劇的な逆転に成功。2連勝をとげた。

翌36年春、桜台高は県室内決勝で久々に中京商を破り、夏への自信を高めた。

他方、いつまでも愛知勢の独走を許しておけないと各地の奮起があり、8月氷見市で開かれた第12回大会は緒戦から白熱した。

しかし、中京商は準々決勝で熊本市商に6―5、桜台高は準決勝で清水商（静岡）に15―14（延長）と食いさがられながらも勝ち進み、2年連続3度目の両者による決勝となった。

桜台はスタートから優勢に試合を進め、後半いちどは4点差をつけた。しかし、中京商の驚異的な粘りは終盤いかんなく発揮され、タイムアップ1分前12―12から逆転の決勝シュートを決め、3連勝をドラマチックなフィナーレで飾りあげた。

高校球史上、この2年間における中京商―桜台高の激斗は、全国大会、県大会、市大会を問はず、すべてが1秒たりとも息の抜けぬ〝死斗〟であった。

はたして、他のスポーツをも含めて、これほどまでにエキサイトしたライバルによる〝宿命的な熱戦譜〟があるであろうか。

熊本市高、3連ぱ成る

男子の熱っぽい激突に負けず女子の角逐も回を追うごとに白熱の度を増した。

記念大会で優勝の熊本市高はその前年、寝屋川高（大阪）との感激的な優勝分けあいを記録しておりつごう2連勝、第11回大会に臨んだ。会場の倉敷は倉敷高女らによって戦前から種が蒔かれ、日本女子ハンドボール発祥の地といってさしつかえなかった。

3連勝に意欲をみせる熊本市高は、2回戦で水海道二高（茨城）に7―5とせまられた以外は順調に勝ち進んだ。決勝の相手はメキメキ頭角を現して来た半田高（愛知）。互角の戦況から熊本市高は後半なかば、得意の速攻で優位に立ち、半田高の反撃をおさえて、史上初の3連勝という快挙を成就させた。この記録はいまだに破られていない。

岡山、大阪を中心に発展の歩みを刻んだ女子界に、熊本市高が3年にわたって不敗を誇り、その座を揺るぎないものとしたことは、その後の日本女子界のすう勢にも多分に影響を与えることになった

高校界の動向・消長が、日本球界の変動につながるのをこの一事でも知ろう。

さて、熊本市高は、翌36年の第12回大会にも、優勝候補の一番手に推されていたのだが、準々決勝で京都女高（京都）に6―6から抽せん負けという不運を招き雄図を空しくした。

純真な高校選手の健斗のあとに待つ抽せんという非情な手段――大会運営のためにはさけられぬことかも知れぬが、はたしてこれが最善な方法だろうか。

余談に走るが、高体連関係者にあえてこの問題の再検討を提起したい。

ともあれ、熊本市高は悲運に泣いた。そして新しい女王の座には半田高が水海道二高（茨城）を破って就いたのである。

前年の決勝で惜敗した半田高は35年の国体で、みごと熊本市高に雪じょく、タイトルを得ている。

この自信が、全日本での優勝に大きく作用しているといえよう。

半田高は、稲沢高（愛知、第4回優勝）打倒を目標に精進を重ねて来たチームだ。

稲沢高を倒すことは、全国最上位を約束することにもつながっていた。それは、男子で中京商が桜台高を目標としたケースに似ている。

32年の国体で準優勝し注目され35年の活躍によってその評判はいっそう高くなった。そして宿願の優勝。一段々々とつみ重ねた努力の開花。その典型である。

半田高で興味深いのは31年8月の第8回全日本総合と33年1月の第4回全日本総合室内（全日本選抜の前身大会）で優勝していることだ。

高校タイトルを獲得する以前に全日本優勝を遂げられたのも、当時の国内女子のレベルを物語る。

実業団が誕生するまで、日本の女子のトップレベルを守って来たのは高校界であった。

ちなみに、半田高以外で高校女子の現役チームが全日本タイトルを獲得した記録としては第7回全日本総合（昭30）の水海道二高がある。

桜台高、5年ぶりの優勝

37年の第13回大会は、はじめて九州（小倉市）で開かれた。

東京（駒沢）、大阪（藤井等）の交互開催期から松山、函館、仙台、倉敷、氷見の各市を経てこれで全国8ブロックを持ち廻ったことになる。参加校も男子41、女子37校と伸びた。（注・未開催ブロックは東海）

男子選手を刺激したのは、大会後に選抜チームを編成して韓国遠征するというニュースだった。＝後掲

男子は4年連続して桜台高×中京商の決勝になるのではといわれたが、桜台高の順当勝ちに引きかえ中京商は準決勝で神代高に敗退・史上初めて東京代表の決勝進出は多いに興味を持たせたが、前半のリードも空しく、後半 相手の反撃を許し、桜台高が5年ぶりに〝優勝〟を持ち帰った。

女子は、2連勝をめざす半田高が準々決勝で菊池農蚕高（熊本）に降り、優勝経験のある明善高（福岡）、寝屋川高、稲沢高、水海道二高らも激しいつぶしあいを演じて決勝は、静岡城北高−菊池農蚕高という初顔合せになった。

静岡城北高は26年の第5回東西対抗と32年の国体で優勝を遂げており、東海では稲沢、半田と並ぶ名門だが、菊池農蚕高は文字通り新星。熊本市高を目標にして成長をとげたものである。

試合は静岡城北高が攻守に一日の長を示して快勝、初優勝の感激にむせんだ。

同校の前身は静岡高女。古い記録を調べると昭和15年の第1回全日本女子選手権（神宮）に出場している。

それから数えて22年目。

徹底した基礎練習の反復が勝因のすべてである。

初の日韓高校交流

37年8月、全日本高校選抜軍（男子）が韓国へ遠征した。

高体連では10周年（34年）を迎えた頃から訪韓の計画をたて、36年秋に日体大が遠征して具体的な交渉が成立、実現の運びとなった。

代表選手は、第13回全日本高校選手権を前に、地域制を重視して選考され、次の15選手が晴れのメンバーに決まった。

▽GK 尾形譲（東京・神代高）牧邦弘（愛知・中京商）▽バックス 青沼正義（北海道・室蘭商）大槻雅夫（茨城・石岡一高）、渡辺正（静岡・清水商）、多田稔（兵庫・兵庫工）、余吾東洋民（愛媛・新居浜工）、村田久（山口・宇部工）▽FW 八重柏和重（宮城・古川工）、坂口学（群馬・桐生高）氷見修（富山・小杉高）小川安人（愛知・桜台高）、木野実（大阪、寝屋川高）、飯端寿昭（大阪・三国丘高）、矢島芳弘（福岡・小倉工）。＝木野が2年。その他は3年生。

役員は菅是敬高体連ハンドボール部長（都立世田谷工高校長）を団長に、徳永陸繁監督、稲石三二コーチ、清水正マネジャー、山田計総務役員という顔ぶれ。一行は8月2日小倉市で結団式を行い、2回の合宿ののち、8月29日羽田から空路出発、31日ソールでの東星高戦を皮切りに6戦を交え、9月10日帰国した。戦績は、別表のとおりだが、注目されるのは7人制を2試合（第1、第2戦）していることだ。

当時の国内球界は、女子の公式試合はすべて7人制が採用されていたのだが、男子はいぜんとして併用というよりも、11人制が主体であった。

韓国で7人制を行ったのは、相手側の要求によるものであったのだろうか。

国内球界は翌38年から男女すべて7人制に一本化したのだが、その最大の理由は「国際情勢によるもの」とされた。

韓国が、初めての日本との高校交流で7人制を日程に組み入れたのは彼らの方が海外の動向に敏感であったからだと思う。高体連史をはなれて、日本ハンドボール史上これは興味深いことだ、と考えるのは筆者のみであろうか。

遠征は成功した。勝負は二の次〝親善〟に集った韓国高校生との交歓は代表選手たちにも強い感銘を与えたのである。

若者の美しい友情をみて両国役員は、以後毎年の交流を約束しあった。

韓国高校選抜の来日

翌38年12月、こんどは韓国高校選抜軍（男子）が来日した。

当初は11月初旬に来日する予定で準備が進められたが、韓国側の事情で延期となり、いちぢは流会もやむを得ないという段階にまで追いつめられたが、両国関係者の努力が実って11月28日、柳錫興長朴淳哲監督ら一行20名が羽田に元気な姿をみせた。

試合はすべて7人制（室内）で行われたが、日本側は別表のように1勝5敗という成績に終わった主力である3年生がすでに第一線を退き練習量が充分でなかったこと、7人制の研究に立ち遅れていたことなどが日本側の反省としてあげられた。第1戦で明星高（東京）が19−11で勝ったあと5

韓国高校界との交流

【全日本高校男子選抜訪韓・昭37】

①	全日本	22	（11−5 / 11−4）	9	東星
②	全日本	17	（5−6 / 12−2）	8	麻浦
	～以上7人制～				
③	全日本	16	（8−3 / 8−3）	6	養成
④	全日本	18	（10−4 / 8−4）	8	大倫
⑤	全日本	14	（8−2 / 6−5）	7	晋成
⑥	全日本	7	（3−5 / 4−2） 引分け	7	五山
	～以上11制～				

【韓国高校男子選抜来日・昭38】

①	明星（東京）	19	（6−4 / 13−7）	11	韓国
②	韓国	38	（16−8 / 22−10）	18	茨城選抜
③	韓国	24	（11−7 / 13−12）	19	名古屋選抜
④	韓国	22	（10−8 / 12−11）	19	兵庫選抜
⑤	韓国	23	（12−8 / 11−9）	17	大阪選抜
⑥	韓国	37	（16−8 / 21−12）	20	福岡選抜
	～いずれも7人制（室内）～				

【下関中央工訪韓・昭43】

①	下関中央工（山口）	18	（8−6 / 10−10）	16	朝鮮大付属
②	大倫（韓国）	16	（10−6 / 6−6）	12	下関中央工
	～いずれも7人制（室内）～				

連敗したことから、当時の本誌(16号)は「たった1週間のうちに日本は韓国チームに追い抜かれた形となった」と書いている。

日本球界の次代を背負う優秀選手による各チームが相次いで韓国高校のエネルギッシュな攻防の前に屈したことは、それまでの交流から推しはかれば予想外ともいえたが、韓国が短時日のうちに、これほどまで若い力を伸ばしていることに驚ろかされたのも事実である。

前項で述べた〝7人制への準備〟の差が、この結果を生んだとみるのは、筆者のこじつけがすぎるであろうか。

国際ハンドボール界におけるアジアの盟友は、いまや強力な体制を完成しつつある――12月7日小倉港から航路帰途につく韓国代表チームを見送りながら日本側関係者の胸は複雑であった。(注・43年の下関中央工遠征関係は次号。)

7人制一本化へ

さかのぼって38年8月。富士吉田市で開かれた第14回大会の男子決勝は2年ぶり4度目の桜台高×中京商。前年久々に王座をとりもどした桜台高はどうしても2連勝を遂げたい気持ちがあった。

この年、すべての公式試合が7人制に一本化されたのがその理由である。7人制の初代王者となることは伝統・名門の意地ともいえたのだ。

一試合々々慎重な桜台高は準決勝で寝屋川高に19―18と大苦戦しながら決勝進出をはたした。一方中京商は高校生ばなれの攻撃力を駆使して勝ち進み、宿縁の決勝となった。前半中京商は2点のリード。しかし桜台高は後半、必死の反撃を成功させて遂に逆転、8回目の優勝を飾ることになったのだが、桜台高の輝やかしい優勝歴の中でも、この日の一勝はひときわ感激の強いものであろう。

女子は静岡城北高と決勝初進出の栃木女高による初めての東日本同士の争覇。

2連勝に自信満々の静岡城北高は、緊張気味の栃木女高を立ちあがりから圧倒し栄冠を獲得した。

翌39年は東京オリンピックの年のため国体(柏崎市)が6月に開かれ、男・桜台高、女・静岡城北高が優勝、夏を前に各地の情勢と各校の実力を予め知ることができた。

15回目を迎えたインター・ハイは8月上旬上田市で開かれた。

開会に先立って15周年記念式が催され7氏に感謝状、77氏に表彰状。男子で盛岡一高(岩手)、青森高(青森)、桜台高、天城高(岡山)、修道高(広島)、新居浜工(愛媛)の6校、女子で涌谷高(宮城)、水海道二高(茨城)、平塚江南高(神奈川)、山梨高、静岡城北高、京都女子高、寝屋川高、那賀高(和歌山)、尼崎高(兵庫)、倉敷青陵高(岡山)、明善高、熊本市立高の12校が表彰校となった。

また、10周年の時のように記念誌が発刊されている。

15周年……それ以後

さて、第15回(昭39)以後第19回(昭43)までは、近年のことでもあり、本稿ではその主な流れを記すに留めたい。

一口でいうならば、この5年間の特色は〝群雄割拠時代〟。また男女とも東日本優勢から再び西日本勢上位になりつつあるということができそうだ。

すなわち、39年の記念大会で男明星高(東京)、女・栃木女高の初優勝チームが生まれたのを機にかっての優勝経験校がタイトルを掌中にしたのは男子では40年の桜台高、女子では40年の静岡城北高だけで39年以後は毎回優勝校が代わり、所属県も転々と散った。

男子は、39年に東京代表として宿願を初めて達した明星高が40年いったんトップの座を明け渡したものの41、42年と連勝、この2年間は国体でも快勝をつづけ文字通り無敵の強みを誇った。

東京代表が高校界の最上位についたのは、第1回東西対抗優勝(23年)の世田谷工以来のことである。

女子は、41、42年と北日本地区の代表が1・2位を占めた。42年(第18回)の室蘭商(北海道)は、球史上2度目の北海道代表の全日本タイトル獲得かと騒がれたが、花巻南高(岩手)に惜敗した(注・北海道代表の全国優勝記録は第8回国体一般女子の北星クがあるだけ)

男女とも、こうして東日本勢が優位をつづけたが、昨年(第19回)は男・下関中央工、女・菊池農と西日本勢がタイトルを握り、再び往時の勢いをとりもどし始めている。

沖縄代表の参加など

優勝校の変動や、地域差の解消などにみられるようなレベルアップもさることながら、軌道にのったブロック高校選手権や新人戦(各地)の開催など、いわゆる〝インター・ハイ周辺〟も大きな飛躍、拡充をとげた。

なかでも、関係者を喜ばせたのは加盟校の増加と沖縄球界との交流であった。

加盟校は、シーズン毎に着実に伸び、特に女子は7人制一本化後急上昇した。日本協会の悲願であった全都道府県協会設立が41年に達成されたが、新興県協会の母体はすべて高校チームであり高体連関係者であった。20周年には男女合わせて千校を越えるだろうという希望は、その2年前―42年に遂げられた。『次の目標は男子千校女子千校だ』と関係者の夢ははてしがない。

沖縄高校界の誕生も、日本におけるハンドボールの成長を示すできごとといえる。

高体連では、40年3月代表チームとして男子の徳山高、熊本市商女子の徳山高、熊本市高を派遣。模範試合、講習会のあと初の交流試合(4月3日・琉球大体育館)を琉球大との間に交えた。

男・熊本市商11―7琉球大

女・徳山高13―9琉球大

この遠征で、沖縄関係者から、〝本土〟の大会への参加が強く要望され同年のインター・ハイが距離的にも近い熊本市での開催ということもあって話は一気にまとまった。

それから5ヶ月後、沖縄代表・興南高(男)が万来の拍手を浴びて陽焼けした姿を熊本に見せた。

どこまで善戦するかといった声をはねのけるように1回戦で土佐高(高知)、2回戦で都城泉ヶ丘高(宮崎)を危げなく破って3回戦に勝ち進んだのはみごとであった。

このあと、沖縄からは毎年代表が送られることになるのだが、41年1月には全日本高校男女が訪琉している。

全日本高校選手権決勝記録とベストエイト②（第11回～第19回）

○……男　　子……○

▽第11回　中京商（愛知）12（3—3、5—5、2—3、2—0）11桜台（愛知）

鎌倉学園（神奈川）、塩山（山梨）、小松実（石川）、清水商（静岡）、伏見（京都）、寝屋川（大阪）

▽第12回　中京商 13（5—6、8—6）12　桜　台

盛岡一（岩手）、氷見（富山）、清水商、寝屋川、鹿児島工（鹿児島）、熊本市立（熊本）

▽第13回　桜　台　14（4—7、10—3）10　神代（東京）

大石田（秋田）、清水東（静岡）、中京商、寝屋川、新居浜工（愛媛）、博多工（福岡）

▽第14回　桜　台　14（6—8、8—5）13　中京商

盛岡一、桐生工（群馬）、伏見工（京都）、寝屋川、修道（広島）、徳山（山口）

▽第15回　明星（東京）　10（5—5、6—1）6　熊本市立

清水商、桜台、加納（岐阜）、堺工（大阪）、新居浜工、徳山

▽第16回　桜　台　18（12—6、6—8）14　名城大附属（愛知）

函館東（北海道）、明星、清水商、佐野工（大阪）、三国丘（大阪）、新居浜工

▽第17回　明　星　8（2—1、6—4）5　桜　台

湯沢（秋田）、上田（長野）、名城大附属、洛陽（京都）、佐野工、熊本市商

▽第18回　明　星　28（12—3、16—6）9　広　（広島）

湯沢、中央大附属（東京）、横浜東（神奈川）、氷見、桜台、添上奈（良）

▽第19回　下関中央工（山口）17（7—6、10—8）14　中央大附属

明星、塩山商、中京、滝川（兵庫）、三原工（広島）、熊本市商

○……女　　子……○

▽第11回　熊本市立（熊本）7（2—2、5—4）6　半田（愛知）

栃木女（栃木）、静岡城北（静岡）、有磯（富山）、那賀（和歌山）、井原（岡山）、明善（福岡）

▽第12回　半　田　12（5—2、7—1）3　水海道二（茨城）

栃木女、静岡城北、京都女（京都）、県尼崎（兵庫）、熊本市立、菊池農蚕（熊本）

▽第13回　静岡城北　9（5—2、4—5）7　菊池農蚕

和洋女（秋田）、水海道二、半田、稲沢（愛知）、京都女、井原

▽第14回　静岡城北　9（7—2、2—2）4　栃木女

水海道二、半田、山陽女（広島）、徳山（山口）、新居浜東（愛媛）、熊本市立

▽第15回　栃木女　6（3—3、3—0）3　静岡城北

深谷女（埼玉）、半田、新居浜東、明善、大分東（大分）、菊池農

▽第16回　静岡城北　8（5—4、3—3）7　熊本市立

栃木女、加納（岐阜）、山陽女、徳山、新居浜西（愛媛）、菊池農

▽第17回　和洋女　5（3—2、2—2）4　花巻南（岩手）

栃木女、静岡城北、夙川学院（兵庫）、山陽女、新居浜西、大分東

▽第18回　花巻南　5（3—2、2—2）4　室蘭商（北海道）

涌谷（宮城）、小高農（福島）、栃木女、名女商（愛知）、山陽女、新居浜商（愛媛）

▽第19回　菊池農　8（3—2、5—1）3　新居浜商

小高農、深谷女、栃木女、清水商（静岡）、名女商、山陽女

40年度に予定された韓国遠征が中止されたこともあったが、この沖縄遠征は前回の指導・普及とはちがって試合が目的とされた。

代表メンバーと成績は次のとおり。

▽団長　村山寛▽男子監督、小袋是郎▽女子監督　嶋田新太郎▽コーチ　中出盛雄　砂長誠▽審判　徳永陸繁▽マネジャー　岡前義春

▽選手　男子＝GK南一夫（大阪・佐野工）、入沢久（静岡・清水商）、FP白川則雄（北海道・函館有斗高）池田正明（宮城・仙台一高）高橋健夫（茨城・麻生高）金子進（埼玉・浦和市高）関勝之（富山・氷見高）雨宮孝（山梨・塩山高）、鈴木博隆（愛知・中京商）、有本充（愛知・名城大附属高）提本知秀（和歌山・和歌山商）、藤中憲二（山口・岩国工）、塩崎信治（愛媛・新居浜工）、榊崇（大分・大分商）

女子＝GK小川恵子（栃木・栃木女高）、中下伊津子（広島・山陽女高）、FP沢田順子（北海道・室蘭商）、熊谷佑子（岩手・盛岡二高）、山口みさ子（茨城・笠間高）細川千枝子（栃木女高）小林八重子（静岡・城北高）、定塚隆子（富山・高岡女高）小島晴美（愛知・名女商）古川美重子（大阪・豊中高）、中司千草（大阪・梅花学園）、浅井喜美子（広島・山陽女）、黒木芙美子（愛媛・新居浜西高）山口レイ子（福岡・明善高）、垂水秀子（熊本・菊池農）

▽男子4試合

全日本高校　32－3　那覇高

全日本高校　42－13　全沖縄

全日本高校　35－14　興南高

全日本高校　47－6　沖縄工

▽女子4試合

全日本高校　44－7　那覇高

全日本高校　25－6　全沖縄

全日本高校　50－1　糸満高

全日本高校　37－4　知念高

【文責・編集部】

ハンドボールの歩み（第13回）

女子ヨーロッパカップ始まる

第1回…ルーマニア　第2回…チェコが優勝

ヨーロッパカップ編 ⑧

女子第一回のヨーロッパカップは1961年　開催

1960年から1961年の冬にかけては、男子は第四回世界選手権大会が開かれることになつていたため、ヨーロッパカップは開催されなかった。この年はこれまでのスウェーデンに代って、ルーマニアが世界選手権の栄冠を獲得する記念すべき年にあたっている。

女子のヨーロッパカップがこの年にはじめて開かれることになり女子のクラブにもようやく明確な目標が作られることになった。

男子と同様に女子も前年の国内チャンピオン同士によって、ヨーロッパカップは争われている。

この年は9ヶ国が参加している。女子の当時の普及状況から考えるとまずまずの参加のしかたであった。

女子の場合、この第一回の大会から、二回戦方式が予選、準々決勝、準決勝、決勝を通して行なわれている。

参加したのは、ソ連、ノルウェー（棄権）、ルーマニア、ユーゴースラビア、西ドイツ、フランス、チェコスロバキア、オーストリア、ポーランドであった。

9チームのため、予選はソ連から出場したシャルジリス・カウナスとオスローHKの両チームの間で争われることになっていたが、オスローHKの棄権で、シャルジリス・カウナスが準々決勝に進んだ。

準々決勝は地域的に比較的近いチーム同士が二回戦方式で対戦することになり、組み合せはルーマニアーユーゴスラビア、西ドイツーフランス、チェコスロバキアーオーストリア、ソビエト連邦ーポーランドとなった。

▽準々決勝

スチインタ・ブカレスト（ルーマニア）　5−6　9−6　スパルタ・スボチーカ（ユーゴスラビア）

1勝1敗となったが、総合点14−12でスチインタ・ブカレストの勝ち。

RSV・ミュールハイム（西ドイツ）　13−3　12−7　US・イブリー・パリ（フランス）

2勝でRSV、ショールハイムの勝ち、

ディナモ・プラーグ（チェコスロバキア）　8−6　4−2　ダニユービア・ウィーン（オーストリア）

2勝でディナモ・プラーグの勝ち

シャルジリス・カウナス（ソ連）　5−3　8−6　クラコビア・クラコウ（ポーランド）

2勝でシャルジリス・カウナスの勝ち

準々決勝でもっとも興味がもたれたのはスチインタ・ブカレストとスパルタク・スボチーカの対戦であった。どちらも有力チームとして、戦前から各チームにマークされているチームであった。その両チームが緒戦でぶつかることになった。

スボーチカはまずホームゲームで熱戦の末、ブカレストを敗ったが、ビジターとして、ブカレストに乗りこんだ時には、3点差をつけられて、破れ、準々決勝で姿を消した。他の三試合は破乱なく進み、強いと目されていたミヨールハイム、プラーグ、カムナスがそれぞれ勝ち進んだ。

▽準決勝

スチインタ・ブカレスト　12−4　8−3　シャルジリス・カウナス

スチインタ2勝

ディナモ・プラーグ　6−3　4−2　RSV・シヨールハイム

ディナモ2勝

両試合とも大差をつけ、ルーマニア、チエコの両チームが勝ち、対戦することになった。

▽決勝

スチインタ・ブカレスト　8−1　5−4　ディナモ・プラーグ

スチインタ・ブカレストの優勝

期待されたディナモ・プラーグもルーマニアでの第一戦に大差をつけられ、ホームゲームでも破れ

るという試合におわり、スチインタ・ブカレストに栄ある第一回ヨーロッパカップの栄光をゆずることになった。

結局、決勝は東欧圏同士、ルーマニア、チェコの争い。これに一回戦でルーマニアに破れたが、一矢を報いているユーゴースラビアこの三国の代表チームが活躍をしたというのが、この第一回の大会であった。

女子第2回大会
チェコが雪じょく

1961年から62年の冬にかけて、女子ヨーロッパカップの第二回大会が開かれている。

参加チームは第一回同様9チームであるが、参加国は8ヶ国と1ヶ国減っている。

ソ連とノルウェーが不参加となり、東ドイツが新たにチームを参加させている。

前年度優勝のスチインタ・ブカレストはそのまま連続出場することになり、ルーマニアからはもう1チーム、ラピッド・ブカレストが参加している。

前回と同様の顔ぶれは、推薦出場のスチインタ・ブカレスト（ルーマニア）、ダニュービア・ウィーン（オーストリア）、RSV・ショールハイム（西ドイツ）、クラコビア・クラコウ（ポーランド）の4チーム、フランスはUS・イーブリーに代りSNUC・アトランチック・ナンテが、ユーゴーはスパルタク・スボーチカに代り、OKK・ベオグラードが、チェコはディナモ・プラーグに代って、スパルターク・プラーグ・ソコローボが出場した。これに東ドイツから初参加のLok・ラングスドルフの9チームが覇権を争った。

一回戦はルーマニアのラピッドブカレストと東ドイツのLok・ラングスドルフの2チームによって争われる1試合だけであった。

▽一回戦

ラピッド・ブカレスト　7−3　11−10　Lok・ラングスドルフ

ラピッド2勝

準々決勝は好試合が数多かった完勝して準決勝に進んだのはスパルタク・プラーグ・ソコローボ1チームだけであり、レベル差が前回に比べるとずっとせばまったといえよう。

皮肉なことに準々決勝で早くも推薦出場のスチインタ・ブカレストとルーマニアから出場のラピッド・ブカレストの同国同士がぶつかるという結果になった。

▽準々決勝

RSV・ミヨールハイム（西ドイツ）　6−1　3−5　ダニュービア・ウィーン（オーストリア）

1勝1敗、9−6の総合点で勝るミヨールハイムの勝ち

スパルタク・プラーグ・ソコローボ（チェコスロバキア）　20−2　16−3　SNUC・アトランティック・ナンテ（フランス）

プラグ2勝

ORK・ベオグラード（ユーゴースラビア）　3−4　7−5　クラコビア・クラコウ（ポーランド）

1勝1敗、総合点10−9でベオグラードの勝ち

スチインタ・ブカレスト　10−8　4−4　ラピッド・ブカレスト

1勝1分でスチインタの勝ち

プラーグはナンテを全くものともせずに降したが、他はいずれも大いに苦しみながら、次の試合に進んだ。特にORベオグラードとクラコビア・クラコウは全くきわどい試合であった。僅かにホームゲームで2点差をつけたベオグラードが準決勝に進出した。

▽準決勝

スパルタク・プラーグ・ソコローボ　6−7　6−2　RSV・ミヨールハイム

1勝1敗、総合点12−9でプラーグの勝ち

ORK・ベオグラード　7−6　5−5　スチインタ・ブカレスト

1勝1分でORKの勝ち。

いずれも接戦で試合が終っているが、一歩の実力の違いでベオグラードとプラーグが決勝に進出した。準決勝に残ったチームを見ると、第1回も第2回もチェコとルーマニアが顔を揃え、ユーゴー、それにソ連と東欧圏が3チーム、それにようやく、西ドイツのRSV・ミヨールハイムが入っているという力の分布であった。第1回は実力がありながら1回戦でルーマニアにあたったユーゴーの不運というものがあったが、すでに60年代の始めは、ハンドボールは東欧に中心が移っていることがお判りいただけよう。

▽決勝

スパルタク・プラーグ・ソコローボ　2−3　9−4　ORK・ベオグラード

1勝1敗、総合点11−7でプラーグの勝ち

プラーグは第1回の雪じょくをとげることができた。実力がぐっと接戦し、ホームゲームが有利になる傾向が現われている。この年の男子はFA・ギョッピンゲン（西ドイツ）の連ぱという偉業が達成されている。それは次回にゆずろう。

（藤本　強）

（注）各試合スコアは右側が1回戦。左側は2回戦。

球界パトロール

勝負の明暗くつきり…日大と早大

▽…日大が勝った。関東学生春季リーグ・2部入れ替え戦（5月14日・駒沢）。

名門早大に対して、前半の劣勢（5—8）を一気にばん回して鮮やかな逆転勝ち（20—17）。選手たちの顔は喜びでクシャクシャだ。

過去2回（42年秋、43年秋）挑んで破れなかった1部の厚い壁をようやくにして突き抜くことができたのである。

▽…日大が関東学連に参加したのは36年秋のこと。

学生スポーツ界の新しい力として他競技でめざましい躍進をとげていた同校のハンドボール界入りには多くの注目が集った。

以来7年余。3部から2部の上位までは順調に歩んだが、1部への道はけわしかった。

『2部から上がるには1部中位の力が必要だ』（安藤全日本学連理事長）といわれるほどで、日大もここで初めて試錬の場に立たされたといってよい。

▽…2部であるがために、学校内での立ち場・条件も恵れず練習場も思うにまかせない。勝ちあがれぬ焦りと新チームにありがちなまとまりの不足からチーム全体の精神面が不安な時期もあった。それがようやく昨年あたりから落ち着いて来た。『伝統校を破って1部入りを果たしたい』という吉田主将らの斗志は盟主ともいえる早大を相手に燃えあがっていたようだ。おそらく、一、二年前の日大なら、前半の点差をくつがえせずに終ってしまっただろう。精神的な成長が、恵れた素質の花を始めて咲かせたのだ。

▽…一方、敗れた早大の気落ちした姿は、この日の空のように暗く重かった。

関東学連の発起校として、戦前から名門の名を欲しいままにし9回の優勝を誇り、今季も優勝候補の一つにあげられていたほどだ。

それが、緒戦芝浦工大に勝ったあとは引分をはさんで5連敗。最悪の事態まで招いてしまったのである。早大は慶大とともに二百名近い先輩をかかえている。両校の盟友意識は強い。

慶大が42年春に2部落ちした時両校の先輩は『2部で早慶戦だけはしたくない』といっていたものだが、その〝心配〟が今秋から現実になってしまう。30年秋、31年春、40年春について史上4度目のことだ。

▽…勝った日大にしても今後への課題は多い。早大はなおさらのことだ。それをのりこえた時、そこには新しくたくましい日大の躍進があり、早大の華やかな復活があるだろう。

勝者の明、敗者の暗。試合後につきものの人間模様を見ながらそんな期待を両校にかけた…（S）

関西大、同志社を降し優勝 2季連続の決定戦

～春の各地学生リーグ戦～

九州は西南大　日体大(関東)安定の攻守で全勝

新シーズン開幕を飾る春の学生リーグ戦は各地で熱のこもった好試合をつづった。

特に、韓国遠征のかかった関東・東海・関西の3学連は実力伯仲の激戦を展じたが、関西では2シーズン連続して関西大と同志社大が同率で優勝決定戦を行い関西大が快勝。

関東は、混戦から日体大が脱け出て全勝、東海も中京大が強味をみせた。

このほか、東北・北海道は東北大、北信越は富山大、中四国は松山商大、九州は西南学院大がそれぞれ優勝を飾った。中国勢を降した松山商大の初優勝は特筆されよう。

一方、女子は関東が日体大、東海は中京大がともに首位の座を守った。

春季各地優勝校

▽東北北海道　東北大
▽北信越　富山大
▽関東（男）　日体大
▽東海（男）　中京大
▽関西　関西大
▽中四国　松山商大
▽九州　西南学院大
▽関東（女）　日体大
▽東海（女）　中京大
…………
▽西日本（既報）　関西大

東北大、秀れた攻撃示す

2位に仙台大が進出

東北・北海道

第3回（秋との通算第16回）東北・北海道学生春季選手権は5月3、4、5の3日間、東北大中央体育館に7大学が参加して開かれた。

A・B二組による予選リーグのあと、各組上位2校で決勝リーグを行った。その結果、東北大が、新進・仙台大を退けて3戦全勝で首位となり、昨年につづき2連勝秋の大会を合わせると4度目のは権を握った。

▽予選リーグA組

仙台大　41－19　福島大
東北学院　20－17　福島大
仙台大　14（分）14　東北学院

【順位】①仙台大②東北学院③福島大

▽同B組

東北大　26－9　山形大
北海道大　24－22　宮城教大
東北大　37－8　宮城教大
北海道大　18（分）18　山形大
東北大　30－10　北海道大
宮城教大　17－13　山形大

【順位】①東北大②北海道大③宮城教育大④山形大

▽5～7位決定リーグ

福島大　26（15－6　11－3）9　宮城教大
福島大　29（19－7　10－5）12　山形大

宮城教大×山形大は予選リーグの記録を適用

【順位】⑤福島大⑥宮城教大⑦山形大

▽決勝リーグ

仙台大　32（17－6　15－1）7　北海道大
東北大　25（17－4　8－6）10　東北学院
東北学院　30（16－6　14－6）12　北海道大
東北大　33（16－9　17－6）15　仙台大

東北大×北大、仙台大×東北学院大は予選リーグの記録を適用

【順位】①東北大3戦全勝②仙台大1勝1敗1分（得61、失54）③東北学院大1勝1敗1分（得54、得51）④北海道大3敗

評・　シーズン初頭ということもあって、基本的なミスが目立ち、またオフェンスとディフェンスの関連的なプレーが見られず、ちぐはぐな試合運びが全般的に多すぎた。

特に、優勝候補にあげられていた東北学院大は、緒戦・仙台大戦で、攻めのまずさから、いたずらにボールだけが廻り、相手ディフェンス陣の中へ切りこむ走りがまったくなかった。

これに対して仙台大は秀れた個人技を巧く活かし宿望の上位進出をとげた。今後の成長がみものである。

優勝した東北大は、攻守に安定しており、特に5試合で一五一点を叩き出した攻撃力が光っていた。

また、チームワークの勝利ともいえるだろう。

東北・北海道学連新役員

東北・北海道学生連盟はこのほど新役員を次のように発表した。

▽会長　峰岸義秋▽副会長　中村雄志▽理事長　橋森禎二（東北大出）▽審判長　高橋長偉（東北学院大出）▽委員長　佐藤正男（東北学院大）▽副委員長　木村豊（宮城教大）

北信越学連役員も決まる

北信越学連は新年度役員を次のように発表した。なお、秋のリーグ戦は10月18、19日金沢市で開く予定。

▽理事長　若山博▽委員長　井川邦彦（富山大）▽副委員長　東川伸一（福井大）、唐沢清治（本州大）▽会計　吉川秀男（金沢美工大）

東海は中京大ゆるがず

東海

4月26日に開幕、5月4日までの5日間名古屋市天神山球技場と中京大で熱戦をくりひろげた。

男子1部は、中京大が今シーズンも攻守に他校を上廻った力をみせて全勝、4シーズン連続19度目の優勝をとげた。2部は中部工大（2度目）3部は名古屋学院大（2度目）が首位となった。

女子は、松阪女短大の不参加から中京大と中京女大が2試合を行い中京大が連勝。5シーズン連続6度目の優勝を決めた。

▽男子1部

名古屋大 17（10－5、7－9）14 南山大
名城大 13（5－6、8－7）13 愛知教大（引き分け）
中京大 20（7－5、13－8）13 岐阜大
名古屋大 17（9－5、8－6）11 岐阜大
名城大 18（12－6、6－4）10 南山大
中京大 21（11－7、10－6）13 愛知教大
名古屋大 13（9－5、4－4）9 名城大
中京大 36（18－7、18－1）8 南山大
愛知教大 25（14－5、11－7）12 岐阜大
愛知教大 27（10－7、17－3）10 南山大
中京大 24（10－7、14－5）12 名古屋大
名城大 25（11－4、14－6）10 岐阜大
中京大 16（8－1、8－8）9 名城大
南山大 23（13－13、10－6）19 岐阜大
名古屋大 20（10－12、10－2）14 愛知教大

【順位】①中京大5戦全勝②名古屋大4勝1敗③愛知教大2勝2敗1分④名城大2勝2敗1分⑤南山大1勝4敗⑥岐阜大5敗

▽同2部

中部工大 32－5 愛知大
名工大 14－13 三重大
中部工大 24－10 三重大
滋賀大 15－11 名工大
三重大 12（分）12 愛知大
中部工大 26－11 滋賀大
三重大 12（分）12 滋賀大
名工大 17－15 愛知大
中部工大 28－13 名工大
滋賀大 21－12 愛知大

【順位】①中部工大4戦全勝②滋賀大2勝1敗1分③名工大2勝2敗④三重大2敗2分⑤愛知大3敗1分

▽同3部

名古屋学院 31－10 大同工大
県立三重大 16－10 静岡大
県立三重大 23－7 大同工大
名古屋学院 32－8 静岡大
名古屋学院 15－12 県立三重大
静岡大 27－20 大同工大

【順位】①名古屋学院大3戦全勝②県立三重大2勝1敗③静岡大1勝2敗④大同工大3敗

▽女子

中京大 12（6－3、6－2）5 中京女大
中京大 17（9－1、8－3）4 中京女大（2勝）

▼各部入れ替え戦（5月10日・中京大）

▽1・2部

岐阜大（1部）21（9－9、12－8）17 中部工大（2部）

▽2・3部

名古屋学院（3部）20－11 愛知大（2部）

名古屋学院大は初の2部昇格を決定

評・藤松　博

1部は、群雄時代の様相を呈するだろうとの当初の予想だったが中京大が基礎技術の面で一日の長があり、比較的楽な試合運びで全勝優勝した。2位～4位までの各校の実力は接近して来た。特に名城大は近県の有力高校選手の入部により、いちだんとその力を充実させて来ている。近い将来、中京大の好敵手になるだろう。

名大、愛知教大はチームとしての総合力に欠ける点があり、今後の練習に期待したい。

2部は中部工大がリーグ加盟以来、短時日のうちに1部校に近い力をつけて来た点が注目される。いま一歩、応用技術を習得して、勝つことに執着するゲーム展開を心がけるべきである。

女子は松阪女短大の欠場で全般的に沈滞ムードはまぬがれなかった。しかし、中京大はメンバーが昨年と変わりなく、全日本総合、全日本学生と意欲的に目標を設定しているので、昨年に比して重厚さが備って来ているようだ。

中京女大も、熱心に練習はつんでいるのだが、あとひとつもろさがある。毎年のことながら女子チームの育成の難しさを感じた。

なお、復審制採用以来はじめてのリーグ戦であったが、宇津野審判長を中心に全審判員とも研究的に運用し、スムーズに試合を消化することが出来た。（東海学連理事長）

富山大が7シーズン連続優勝

北信越

5月17・18の両日福井大体育館に7大学が参加して開かれた。

2組の予選リーグのあと、各組同位者によって順位決定戦を行った。その結果、予選から好調の富山大が決勝でも金沢工大を前半から圧倒、7シーズン連続通算8度目の優勝を飾った。

▽予選リーグA組

金沢工大 18－16 金沢大
金沢工大 32－6 本州大
金沢大 22－10 本州大

【順位】①金沢工大②金沢大③本州大

▽同B組

富山大 18－12 福井大
金沢美大 14－11 信州大
富山大 37－4 信州大
福井大 21－13 金沢美大
富山大 26－6 金沢美大
福井大 24－9 信州大

【順位】①富山大②福井大③金沢美大④信州大

▽5・6位決定戦

本州大 19（10－6、9－2）8 金沢美術工芸大

▽3・4決定戦

福井大 28（15－10、13－8）18 金沢大

▽優勝決定戦

富山大 28（13－12、15－7）19 金沢工大

※戦評は23頁。

中、立、芝が4勝で並ぶ

日大1部へ　日体大女子18季連続優勝

関東

4月20日から5月10日までの9日間、駒沢第一及び第二球技場に男子1、2、3部各8校と同4部9校、それに女子6校が参加して105ゲームが行われた。休日と好天に恵まれ、連日スタンドは満員という活況を示し、注目の1部は互いに星をつぶしあう大混戦となったが、日体大が着実に白星を重ね最終日を待たず2シーズンぶりを19度目の優勝を決めた。2〜4位は得失点差。

2部は、攻撃力のいい日大が全勝し2連勝（3度目）。3部は東京学芸大が1位決定戦で関東学院を降し3度目の優勝。新加盟2校をふくむ4部は東海大が初優勝した。

女子は予想どおり、日体大と東京女体大が最終試合で優勝をかけて対戦し日体大が辛勝、18度目(連続）の優勝をとげた。日体大の対学生連勝記録はこれで「79」に伸びた。

早大、最下位の不振

▽男子1部

中央 18（13—4、5—4）8 法政

日体 22（13—3、9—3）6 東京教大

早稲田 20（13—5、7—11）16 芝浦工大

立教 20（9—6、11—4）10 明治

日体 19（7—6、12—5）11 明治

法政 19（12—9、7—8）17 早稲田

芝浦工大 18（9—6、9—9）15 中央

【芝浦】	得		【中央】	得
渡辺	0	GK	望月	0
高鍬	2	FP	喜田	1
金子	3		植木	4
大矢	4		長広	1
明石	1		佐藤光	1
大江	3		平元	0
木全	1		長田	1
森	4		平野	0
新実	0		佐藤要	6
平瀬	0		小井土	0
			花輪	1
18（3）		7MT	（1）15	

（審・勝　江名）

立教 8（2—1、6—5）6 東京教大

立教 23（11—5、12—5）10 法政

中央 17（11—2、6—8）10 明治

早稲田 15（7—5、8—10）15 東京教大　引き分け

【早大】	得		【教大】	得
山本	0	GK	上野	0
鈴木幸	3	FP	斎藤	4
鈴木博	1		浅野	4
尾島	2		梁川	3
杉山	6		松浦	0
大竹	0		高橋	1
斎藤	3		久下	1
島田	0		杉山	0
高橋	0		綿引	2
阿河	0		松尾	0
15（0）		7MT	（1）15	

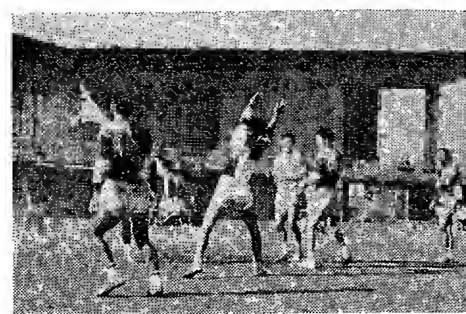
（審・江名　中根）

日体 17（8—3、9—4）7 芝浦工大

日体 21（12—8、9—4）12 法政

【日体】	得		【法政】	得
大村	0	GK	和田	0
			川畑	0
井上	3	FP	大島	2
谷薬	7		西村	2
笠原	4		荒井	1
大川	0		武井	5
塩崎	0		田上	1
斎藤	5		森	0
串野	1		大浜	0
氷海	1		三浦	0
松原	0		菅	0
池田	0		中村	1
21（0）		7MT	（3）12	

（審・久田　斎藤）



明治 15（8—7、7—5）12 早稲田

東京教大 13（5—5、8—6）11 中央

芝浦工大 19（11—8、8—9）17 立教

【芝浦】	得		【立教】	得
渡辺	0	GK	馬淵	0
高鍬	2	FP	小野口	7
平瀬	0		加藤	0
金子	3		戸田	1
大矢	0		倉前	6
大江	6		古谷	0
木全	5		橋本	0
森	2		原本	0
新実	1		吉本	3
明石	0		福田	0
若崎	0			
19（1）		7MT	（1）17	

芝浦工大 20（10—5、10—5）10 明治

法政 14（9—5、5—4）8 東京教大

立教 17（12—4、5—11）15 早稲田

【立教】	得		【早大】	得
菱形	0	GK	山本	0
馬淵	0		吉田	0
小野口	8	FP	鈴木幸	5
加藤	2		鈴木博	1
戸田	2		尾島	2
倉前	3		杉山	2
古谷	1		大竹	1
橋本	0		斎藤	4
原本	0		島田	0
福田	0		武藤	0
吉本	1		阿河	0
17（4）		7MT	（0）15	

（審・渡辺　近藤）

日体 12（6—3、6—6）9 中央

【日体】	得		【中央】	得
大村	0	GK	望月	0
井上	0	FP	喜田	4
谷藤	4		植木	5
笠原	3		長広	0
氷海	0		平元	0
大川	1		中野	0
塩崎	0		佐藤光	0
斎藤	2		小井土	0
池田	0		佐藤要	0
亀谷	0		花輪	0
松原	2		植田	0
12（0）		7MT	（1）9	

（審・北井　大塚）

明治 16（10—6、6—5）11 法政



【明治】	得		【法政】	得
田中	0	GK	和田	0
田辺	0	FP	中村	0
藤井	7		大島	0
野村	3		西村	2
鈴木	0		荒井	3
住田	3		大浜	3
浦野	3		武井	2
末田	0		田上	1
佐藤	0		小林	0
安倍	0		三浦	0
16（0）		7MT	（0）11	

（審・佐野　尾形）

芝浦工大 24（9—6、15—11）17 東京教大

日体 22（15—3、7—6）9 早稲田

中央 19（11—5、8—5）10 立教

この結果、各校とも2敗以上を記録、6戦全勝の日体大が最終日を待たず優勝を決めた。

東京教大 11（5—6、6—4）10 明治

関東学生春季（男子1部）

	日	中	立	芝	法	教	明	早	勝	負	分	得	失
①日体	…	○	○	○	○	○	○	○	7	0	0	132	67
②中央	●	…	○	●	○	●	○	○	4	3	0	110	84
③立教	●	●	…	●	○	○	○	○	4	3	0	110	96
④芝浦	●	○	○	…	●	○	○	●	4	3	0	125	119
⑤法政	●	●	●	○	…	○	●	○	3	4	0	96	125
⑥教大	●	○	●	●	●	…	○	△	2	4	1	79	102
⑦明治	●	●	●	●	○	●	…	○	2	5	0	82	110
⑧早大	●	●	●	○	●	△	●	…	1	5	1	101	125

【2部順位】①日本大7戦全勝　②国士館6勝1敗　③慶応5勝2敗　④明星4勝3敗　④防衛大4勝3敗　⑥順天堂2勝5敗　⑦東大1勝6敗　⑧武蔵工大7敗

【明治】	得		【教大】	得
田中	0	GK	上野	0
田辺	1	FP	斎藤	0
藤井	4		浅野	3
野村	1		水藤	0
鈴木	4		梁川	2
住田	0		松浦	0
浦野	0		高橋	2
未田	0		久下	3
佐藤	0		杉山	0
安倍	0		綿引	1
	（1）10	7MT	11（0）	

（審・久田、上久保）

法政 23（8－10、15－11）21 芝浦工大

中央 21（9－5、12－8）13 早稲田

日体 19（8－8、11－5）1 立教

2位国士館、慶応3位に

【立教】	得		【日体】	得
馬淵	0	GK	大村	0
菱形	0		海江田	0
小野口	5	FP	井上	5
加藤	3		谷藤	6
戸田	1		笠原	0
倉前	3		大川	1
古谷	1		塩崎	0
橋本	0		斎藤	4
原本	0		氷海	1
福田	0		池田	1
吉本	0		松原	1
中西	0		高橋	0
	（0）13	7MT	19（3）	

（審・松田、大塚）

▽同2部

慶応 23（11－9、12－4）13 武蔵工大

国士館 22（13－7、9－5）12 順天堂

日大 24（11－2、13－4）6 東大

明星 17（12－6、5－4）10 防衛大

日大 32（18－5、17－2）7 武蔵工大

慶応 15（10－1、5－7）8 東大

国士館 13（8－4、5－6）10 防衛大

明星 11（6－2、5－5）7 順天堂

明星 23（11－7、12－6）13 武蔵工大

国士館 23（10－5、13－2）7 東大

防衛大 12（3－6、9－5）11 慶応

日大 20（14－7、6－1）8 順天堂

明星 22（12－6、10－9）15 東大

慶応 18（11－4、7－11）15 順天堂

国士館 31（17－1、14－7）8 武蔵工大

日大 15（9－5、6－6）11 防衛大

日大 22（16－5、6－2）7 明星大

防衛大 22（13－5、9－5）10 東大

国士館 14（7－9、7－4）13 慶応

順天堂 20（12－4、8－4）8 武蔵工大

慶応 20（10－11、10－5）16 明星

順天堂 17（7－1、10－3）4 東大

防衛大 24（11－8、13－6）14 武蔵工大

日大 23（10－11、13－4）15 国士館

【国士】	得		【日大】	得
細野	0	GK	吉田	0
田上	5	FP	今成	2
川添	2		元田	4
池田	6		館泉	3
北村	0		松	5
山口	1		田中	3
臼井	0		細谷	0
清水	1		岩佐	0
比嘉	0		渡辺	2
吉田	0		宮川	4
橋本	0		栗岩	0
	（3）15	7MT	23（0）	

（審・渡辺、山口）

東大 22（11－6、11－7）13 武蔵工大

防衛大 14（4－6、10－6）12 順天堂

国士館 25（15－11、10－7）18 明星

日大 23（14－9、9－8）17 慶応

決定戦で学芸大首位

▽同3部

明治学院 20－8 東京理科大

東京学芸大 21－12 千葉商大

関東学院 20－14 千葉工大

茨城 30－1 上智

東京学芸大 28－10 上智

関東学院 16－7 東京理科大

千葉工大 23－14 明治学院

茨城 16－12 千葉商大

明治学院 19－10 上智

東京学芸大 24－13 千葉工大

関東学院 23－21 千葉商大

茨城 19－7 東京理科大

関東学院 14－12 上智

東京学芸大 26－12 東京理科大

明治学院 17（分）17 千葉商大

千葉工大 18－14 茨城

明治学院 14－13 東京学芸大

千葉商大 17－7 東京理科大

関東学院 12－11 茨城

千葉工大 18－8 上智

東京理科大 8（分）8 上智

東京学芸大 16－12 関東学院

千葉商大 14（分）14 千葉工大

千葉工大 17－10 東京理科大

明治学院 15－18 茨城

千葉商大 15－14 上智

関東学院 13－12 明治学院

東京学芸大 18－12 茨城

▽1位決定戦（5月12日・上智大）

東京学芸大 10（6－4、4－5）9 関東学院

▽7位決定戦

上智大 不戦勝 東京理科大

【順位】①東京学芸大6勝1敗②関東学院6勝1敗③明治学院、千葉工大4勝2敗1分⑤茨城大3勝4敗⑥千葉商大2勝3敗2分⑦上智大6敗1分⑧東京理科大6敗1分

東海大が初優勝遂ぐ

▽同4部

流通経済大 21－10 東京農工大

東海 30－7 青山学院

都立大 7－5 独協

横浜商大 21－15 山梨

横浜商大 26－17 一橋

山梨大 24－20 流通経済大

独協 23－14 東京農工大

都立大 16（分）16 東海

独協 28－19 青山学院

一橋 16－15 山梨

東海 28－9 東京農工大

横浜商大 32－10 流通経済大

横浜商大 27－15 東京農工大

一橋 25－12 青山学院

東海 26－13 山梨

都立大 21－17 流通経済大

東海 21－12 横浜商大

東京農工大 16－8 一橋

都立大 23－8 青山学院

独協 28－19 流通経済大

東海 24－14 独協

流通経済大 27－12 青山学院

都立大 12－5 一橋

山梨大 21－16 東京農工大

横浜商大 25－16 青山学院

都立大 22－8 東京農工大

東海 23—8 一橋
独協 21—18 山梨
東京農工大 15—8 青山学院
都立大 15—10 山梨
横浜商大 20—15 独協
一橋 23—15 流通経済大
独協 16—10 一橋
東海 35—14 流通経済大
山梨 34—10 青山学院
横浜商大 19—17 都立大

【順位】①東海大7勝1分②横浜商大7勝1敗③都立大6勝1敗1分④独協学園大5勝3敗③山梨大3勝5敗＝新加盟⑥一橋大3勝5敗＝新加盟⑦流通経済大2勝6敗＝新加盟⑧東京農工大2勝6敗⑨青山学院8敗

東女体大、惜しくも敗る
日女体大が3位に

▽女子

日体大 19（10—3、9—4）7 日女体大
東女体大 45（25—1、20—1）2 国士館
東京教大 17（8—2、9—0）2 国士館
日体大 19（10—0、9—0）0 東京学芸大
東女体大 29（17—2、12—0）2 東京学芸大
日女体大 8（4—2、4—4）6 東京教大

【日女】得			【教大】	得
酒井	0	GK	黒田	0
鈴木	0	GK	西尾	0
上野	3	FP	山口	1
村上	1	FP	渡辺	1
柴	2	FP	山本	0
松永	0	FP	継	0
海野	0	FP	韮沢	2
原	2	FP	川島	0
宮脇	0	FP	橋本	2
普奈木	0	FP	岡田	0
岸	0	FP	林	0
8	（1）	7MT	（0）	6

（審・遠藤 高野）

日体大 30（18—1、12—0）1 国士館
日女体大 22（16—2、6—1）3 東京学芸大
東京学芸大 12（7—2、5—1）3 国士館

【国士】	得		【学芸】	得
藤原	0	GK	中島	0
石井	0	FP	加藤爽	2
椙木	0	FP	小坂井	3
鈴鹿	0	FP	蒲原	0
宇津井	0	FP	塩島	1
渡辺	1	FP	藤田	0
海老原	2	FP	加藤純	0
中島	0	FP	浅井	3
		FP	長嶺	3
3	（1）	7MT	（1）	12

（審・渡辺 山口）

東女体大 20（9—4、11—1）5 日女体大
日体大 19（11—4、8—2）6 東京教大
日女体大 25（12—1、13—0）1 国士館
東女体大 20（9—1、11—2）3 東京教大
東京教大 13（6—3、7—3）6 東京学芸大
日体大 13（6—6、7—4）10 東女体大

【東女】	得		【日体】	得
松田	0	GK	秋間	0
坂野	0	GK	内池	0
熊谷	2	FP	津熊	3
浅見	1	FP	沢谷	4
中島	4	FP	中村	1
高橋恭	1	FP	佐藤幸	0
姫野	1	FP	永田	2
高橋清	1	FP	佐藤温	0
水上	0	FP	木村	3
川井	0	FP	萩原	0
関	0	FP	桶田	0
伊部	0	FP	山本	0
10	（0）	7MT	（0）	13

（審・池田 斎藤）

【順位】①日体大5戦全勝②東京女体大4勝1敗③日女体大3勝2敗④東京教大2勝3敗⑤東京学芸大1勝4敗⑥国士館大5敗

各部とも入れ替え成立

▼各部入れ替え戦（5月14日・駒沢）

▽1～2部

日大（2部）20（15—9、5—8）17 早稲田（1部）

日大の1部昇格は36年秋加盟以来初めて。早大の2部転落は39年秋以来のこと

▽2～3部

東京学芸大（3部）21（12—9、9—5）14 武蔵工大（2部）

▽3～4部

東海（4部）26—11 東京理科大（3部）

成蹊大が新加盟

関東学連では、今秋のリーグ戦から成蹊大（東京）が加盟すると発表した。これで男子は34校となり、4部が10校となる。

関東学生リーグ総評

一部は、日体大が予想どおり安定した力をみせて、最終日を待たず優勝を決めた。全日本へGK本田と藤中を参加させてはいたが、さすがにチーム層が厚く、中央大戦以外はまったく危気がなかった。

2位には、中央、立教、芝浦の3校が並んだが、プロ野球的にいえば、日体大とは3ゲーム差。水をあけられての一線である。各校とも、出来にムラがあり、わずかな崩れから敗戦を招くことが多かった。この課題が克服されれば高い内容を求めることの出来るチーム力を擁している。

B級4校は、さらに好・不調の波が激しく、地力不足を感じさせた。緒戦・芝浦工大を降した早稲田がその後ズルズルと黒星を重ねたのはどうしたことか。

入れ替え戦にも敗れて2部落ちしてしまったことは、斯界きっての名門だけに残念だ。奮起を期待したい。

二部は日大と国士舘が元気いっぱいの試合ぶりを示し、遂に日大が優勝—一部昇格という宿願を達した。一部でもかなりやれそうだが、いささか斗志と粗暴を混同したプレーが見られるのは感心しない。国士館、明星、防衛大などの健斗に比べ、慶応の低調はみじめ。全般に二部はスピード感に乏しく、内容的にも物足りない。三部は学芸大—関東学院が決定戦にもつれこむ接戦となったが、全般にレベルアップしており、四部もそれなりのまとまりを見せて来ている。

女子は、有力新人を加えた東京女体大が日体大の連勝をストップするのではないかとみられたが、日体大がよく首位を守り切った。

質量だけでは勝てぬという典型を示した一戦で、日体大の伝統意識の強さが印象づけられた。しかし、東女体大の成長は、今後大いに楽しみなものがある。カムバックした日女体大が3位、東京教大の4位はまず順当。

運営面では、学連委員の広報面での努力が実り、連日多くのファンを動員していたのはすばらしい。しかし、三、四部の運営—特に審判員の不足などによる試合開始の遅延—には研究の余地が残されており、プログラムの優勝校一らん表から戦前の部分をカットするような、らんぼうも反省して欲しい。

同大、最終日に追いつく
大阪経大の活躍めだつ

関西

1部6、2部6、3部6、4部8校による春季リーグ戦は、4月26日大阪府立大球技場で開幕。5月10日までの7日間にわたって行われた。1部は、予想どおり関西大が堅実に試合を進めたのに対し同志社大は緒戦で大阪経大に敗れ苦しい展開となった。

無敗の関西大、1敗の同志社大の試合は最終日に行われたが、奮起した同志社大が劇的な逆転勝ちをおさめ同率となり、2シーズン連続史上4度目の優勝決定戦にもつれこんだ。

決定戦は前半まったく互角から後半に勝負を持ちこんだが、関西大は終盤鮮やかな攻撃を実らせて快勝。2シーズン連続通算5度目の優勝を飾った。

2部は甲南大がすばらしいまとまりをみせ優勝（4度目）、3部は大阪歯科大、4部は追手門学院大がそれぞれ初優勝した。

▽男子1部

関西大 31（17―10、14―3）13 大阪体大

【関大】	得	【体大】	得
GK 和田	0	GK 谷岡	0
GK 入江	0	GK 逢坂	0
FP 馬着	4	FP 新田	0
中辻	1	三宅	0
許	9	坂口	2
松田	2	足立	1
西脇	3	八山	0
伊藤	1	植田	4
竹内	0	荒川	5
小島	1	藤井	0
宮松	8	藤崎	1
安原	2	中田	0

（審・中村、橋谷）

31（2） 7MT （1）13

大阪経大 18（10―3、8―7）10 同志社

【経大】	得	【同大】	得
GK 今井	0	GK 二橋	0
GK 森友	0	GK 岩田	0
FP 奥川	1	FP 町田	2
木村	0	舟木	3
水野	2	光田	0
桐	7	大羽	1
脇田	6	阪野	0
清水	3	中野	4
沢田	0	富田	0
高川	0	増岡	0
大路	0	松井	0
佐藤	0	水野	0

（審・山崎、橋谷）

19（1） 7MT （0）10

桃山学院 24（15―5、9―8）13 関学

【桃山】	得	【関学】	得
GK 岸井	0	GK 久岡	0
GK 佐藤	0	GK 昇島	0
FP 山口	2	FP 米瀬	1
岡崎	0	細井	2
今西	2	木村	0
提本	3	真砂	6
岡山	2	山本	0
三国	7	高永	1
土田	7	大門	3
森	0	玉井	0
堀本	0	本徳	0
花	1		

（審・山崎、橋谷）

24（2） 7MT （0）13

同志社 13（6―4、7―6）10 桃山学院

大阪経大 19（11―5、8―3）8 大阪体大

関西大 26（14―11、12―7）18 関学

同志社 15（7―4、8―9）13 関学

桃山学院 16（7―5、9―5）10 大阪体大

関西大 18（9―5、9―8）13 大阪経大

大阪経大 17（7―9、10―2）11 関学

同志社 10（3―4、7―5）9 大阪体大

関西大 21（10―6、11―5）11 桃山学院

関西学生春季（1部）

	関	同	桃	経	学	体	勝	負	得	失
①関西大	…	●	○	○	○	○	4	1	108	68
②同志社	○	…	○	●	○	○	4	1	61	62
決定戦関大20―12同大										
③桃山学	●	●	…	○	○	○	3	2	75	70
③大経大	●	○	●	…	○	○	3	2	90	61
⑤関　学	●	●	●	●	…	○	1	4	72	94
⑥大体大	●	●	●	●	●	…	0	5	52	93

【2部順位】①甲南大4勝1敗 ②京都大、神戸大、大阪外国語大3勝2敗 ⑤大阪大1勝4敗⑥立命館大1勝4敗

関学 17（11―6、6―6）12 大阪体大

桃山学院 14（8―6、6―7）13 大阪経大

同志社 13（8―4、5―8）12 関西大

【同大】	得	【関大】	得
GK 二橋	0	GK 和田	0
GK 岩田	0	GK 入江	0
FP 町田	0	FP 馬着	3
舟木	2	中辻	0
光田	0	許	0
大羽	0	松田	2
阪野	1	西脇	1
富田	0	伊藤	0
中野	6	竹内	0
増岡	0	小島	0
松井	1	宮松	5
水野	3	安藤	1

（審・八田、前田）

13（1） 7MT （2）12

同大、前半の健斗実らず

▼優勝決定戦（5月11日・大府大）

関西大 20（12―4、8―8）12 同志社

【関大】	得	【同大】	得
GK 和田	0	GK 二橋	0
GK 安原	0	GK 岩田	0
FP 馬着	4	FP 町田	1
中辻	0	舟木	4
許	4	光田	0
松田	7	阪野	0
西脇	2	富田	0
伊藤	0	中野	2
竹内	0	増岡	0
小島	0	松井	2
宮松	3	水野	3
安藤	0	許斐	0

（審・前田、八田）

20（0） 7MT （0）12

前半はどちらも試合の主導権を握ることができなかったが、後半になると関西大は、許、松田のコンビネーションプレーが調子にのり13分には15―9と優位に立った。

同大はこのあと松井、町田のゲットで4点差につめたが、関大も宮松の得点で突きはなし、終盤さらに加点して快勝した。

同大は、前半、水野の活躍で前日（リーグ戦）につづく健斗となったが、後半崩れをみせたのは惜しまれる。

甲南大、1敗するも優勝

▽2部

立命館 10（3―5、7―2）7 京大

大阪外国語大 21（12―8、9―6）14 甲南

神戸大 13（7―5、6―7）12 大阪大

京大 15（6―6、9―6）12 大阪大

神戸大 16（9―4、7―3）7 大阪外語大

甲南 19（13―6、6―3）9 立命館

京大 17（7―4、10―10）14 大阪外語大

大阪大 20（11―11、9―5）16 立命館

甲南 13（7―4、6―4）8 神戸大

神戸大 16（11―5、5―4）9 立命館

大阪外語大 14（7―8、7―5）13 大阪大

甲南 16（6―10、10―4）14 京大

【京大】	得	【甲南】	得
GK 田中	0	GK 和田	0
		GK 松谷	0
FP 日下部	4	FP 吉川	4
足立	1	山下	2
三品	0	中村	5
岡本	4	守谷	2
藤森	2	辰己	2
笹川	2	浜岡	1
加藤	0	中川	0
真縦	1	浦野	0
光田	0	三宅	0
大木	0	鷲尾	0

16（3） 7MT （1）14

京大 14（8―5、6―6）11 神戸大

大阪外語大 34（14―6、20―3）9 立命館

甲　南 24（10―4、14―6）10 大阪大

▼5・6位決定戦

大阪大 20（9―9、11―4）13 立命館

大阪歯大、全勝で首位

▽3部

和歌山大	20―12	大阪薬大
大阪府大	18―11	京都教大
大阪歯大	17―13	大阪市大
大阪府大	11―8	大阪薬大
大阪歯大	11―9	和歌山大
京都教大	―	大阪市大
大阪市大	15―8	大阪府大
大阪歯大	10―7	大阪薬大
和歌山大	11―9	京都教大
大阪薬大	8―7	大阪市大
大阪歯大	22―12	京都教大
和歌山大	12―10	大阪府大
大阪市大	16―14	和歌山大
大阪薬大	12―10	京都教大
大阪歯大	13―12	大阪府大

【順位】①大阪歯科大5戦全勝②和歌山大3勝2敗③大阪府立大・大阪市立大・大阪薬科大2勝3敗⑥京都教育大1勝4敗

追手門学院が優勝

▽4部

京都工大	14―7	大阪教大
近　畿大	14―12	京都産業大
大阪教大	16―6	竜谷大
大阪工大	13―9	京都工大
京都産大	19―12	関西外語大
追手門学院	31―8	近畿大
近　畿大	12―11	京都工大
京都産大	22―7	竜谷大
追手門学院	26―9	大阪教大
大阪工大	25―12	関西外語大
追手門学院	24―5	関西外語大
大阪工大	28―8	竜谷大
大阪教大	15―7	関西外語大
大阪工大	18―15	近畿大
京都工大	18―10	京都産大
追手門学院	25―8	竜谷大
大阪工大	17―14	京都産大
追手門学院	27―11	京都工大
大阪教大	8―5	近畿大
竜谷大	15―10	関西外語大
大阪工大	18―10	大阪教大
追手門学院	23―16	京都産大
関西外語大	11―5	近畿大
京都工大	22―10	竜谷大
近畿大	17―8	竜谷大
京都工大	13―9	関西外語大
京都産大	14―6	大阪教大
追手門学院	23―17	大阪工大

【順位】①追手門学院大7戦全勝②大阪工大6勝1敗③京都工業繊維大4勝3敗④近畿大・京都産業大・大阪教大3勝4敗⑦関西外語大・竜谷大1勝6敗

甲南大、3季ぶりに復帰

▼各部入れ替え戦（5月15日・金岡）

▽1～2部

甲南大（2部）15（6―8、9―5）13 大阪体大（1部）

甲南大は3シーズンぶりに1部へ復帰。

▽2～2部

立命館（2部）22（12―8、10―4）12 大阪歯大（3部）

▽3～4部

追手門学院（4部）22―14 京都教大（3部）

関西学生総評・児山　圭一（関西学連委員長）

1部の優勝は予想どおり関大であったが、西日本学生選手権（4月・大阪）ほどのスピードがなく最終日に3勝1敗の同志社に敗れたため同率となり、2シーズン連続優勝決定戦にもつれこんだ。

決定戦は20―12で関西大が勝ったものの、全勝の実力を、わずかなスキから無にしてしまったのは惜しまれよう。

水野の活躍で関大に勝ち、結局は2位となった同志社も、初日に大阪経大に敗れるなど、実力に安定感がなく、2日目以後を自から苦しいものにしてしまった。全日本にエース中井を抜かれた穴がやはり大きく響いていた。

3位は大阪経大と桃山学院大が3勝2敗で並んだが、大阪経大の健斗が目立った。試合内容もよく今後の活躍が期待される。上位4強の実力差はますます接近して来た。

5位関学、6位大阪体大は、チーム力からみて順当のようにも感じるが、大阪体大は進境が伝えられていただけに、全敗に終るとは意外だった。関学は、いちぢは学園問題から不出場さえ伝えられたのだが元気な姿をみせてくれた。

2部は甲南大が、大阪外大に不覚をとったが、残り4戦は1部中位の力を示して快勝。入れ替え戦にも勝って3シーズンぶりで今秋から1部に上がる。活躍が期待できる。2位以下はほとんど実力差がない。

3部は、大阪歯大が順当勝ちした。和歌山大の進境も目立った。4部は、追手門学院が、全試合20点以上をたたき出す攻撃力にモノを云わせて快勝、3部入りも果たした。

甲子園大（女子）が発足

甲子園大学（兵庫県宝塚市）では、このほど女子チームを発足させた。関西学連の女子は大阪体大、大阪薬大につぎ3校目。

全日本学生、室内で開催

関東学連では11月26日から東京で開く今年の全日本学生選手権を男女とも全試合、室内で行うことに内定した。

松山商大、宿願を果たす

成長の攻守、中国勢を打倒

中四国

5月17、18日の両日広島工大球技場に10大学が参加して開かれた1部は、進境を伝えられた松山商大が、定評どおりの攻守を示し中国勢を連破、初の優勝をとげることに成功した。

2部は2組の予選リーグのあと各組同位者による順位決定戦を行い、近畿大呉が優勝した。

【順位】①松山商大4戦全勝②岡山大2勝1敗1分③広島大福山2勝1敗1分④山口大1勝3敗⑤広島商大4敗

【2部順位】①近畿大呉②広島工大③愛媛大④香川大⑤広島大

西南、鹿大の善戦退ける

九州

第10回全九州学生選手権（トーナメント）は5月17、18日の両日宮崎市の宮崎県体育館に10大学が参加して行われた。

各校とも著しいレベルアップのあとをみせ、好試合がつづいたが決勝は西南学院大と鹿児島大の間で争はれ、後半、西南学院が辛くも優位に立つて鹿児島大の善戦を退けた。6年連続優勝である。

▽準決勝

西南学院 12（6—3 / 6—5）8 福岡教大

鹿児島大 18（5—7 / 13—5）12 熊本商大

▽3位決定戦

熊本商大 18（9—5 / 9—6）8 福岡教大

▽決勝

西南学院 15（6—6 / 9—7）13 鹿児島大

「中四国学生」「九州学生」の詳報は次号。

北信越学生・評

若山 博

予選リーグA組では金沢工大—金沢大戦が予想に反してもつれ、二転、三転の末、金沢工大が逆転勝ち。その余勢をかって本州大に大勝、決勝へ進出した。

B組は、富山大が福井大に前半食い下られたほかは危気なく勝ち星をあげ、首位を占めた。

順位決定戦に入り、三・四位決定で福井大学と全日大学が対戦し前半二五分までシーゾゲームを演じ点差が開いてからも終始内容ある好ゲームであったが技術面に勝る福井大学の順当な勝利であった。

優勝決定戦では試合運びとシュート力に優る富山大の七連覇となったが昨シーズン二・三位の金沢大学本州大学を破り富山大学には最後まで肉迫した金沢工大の敢斗を讃えたい。

各シーズン毎に成績を上昇していた本州大学は主力選手の不参加場でその精彩を欠いたのが惜しまれる奮起されたい。

昨年春秋二位の金沢大学は一段と充実した力をつけたと見られていたが勝運に恵まれず四位に甘じた。

全般的には向上のあとが見られるものの、スピード不足と下位チームにおけるスタミナ不足が目立った。トレーニング法、練習法に一段の工夫を加えて更に前進を期待するものである。（北信越学連理事長）

3代表（日体大 中京大 関西大）で決定戦

6月下旬に韓国遠征

全日本学生連盟では韓国遠征校代表決定戦を6月2日、駒沢屋内球技場で行うが日程を次のように決め発表した。

出場するのは、関東（日体大）東海（中京大）、関西（関西大）の3学連春の優勝校でリーグ戦で勝者を決める。

▽関西大—中京大（11時）▽日体大—中京大（13時10分）▽日体大—関西大（15時20分）

なお、5月29日韓国から全日本学連に入った連絡によると、日本チームの遠征は6月下旬から7月上旬にかけて行われることになりそうで、10日間に5試合が予定されている。

訂正 ▽本誌前号5頁、井上素行選手のポジションをGKとしましたのはFPの誤り。▽同24頁4段3行目、「つまり31年……」は「32年」の誤り。▽同31頁同大個人記録の得点を大羽2、阪野1、中野3に訂正。

新連載・ヨーロッパの技術研究(1)

重要なシンポジューム

藤本　強

前号まで19回にわたり、フランスの技術研究を連載してきた。その前にはやはり十数回にわたって、西ドイツの技術研究を連載してきた。

フランスの技術研究は「7人制ハンドボール」という書名のＩＨＦ競技委員ルネ・リキャール氏の著書を中心にして見てきた。これは技術・戦術論が主要なものであり、その前に連載した西ドイツの技術研究は〃ハンドバル・ヴォッへ〃というドイツのハンドボール週刊誌にでている技術戦術論を主にしたものの紹介であった。

今回から連載していくのは、単なる技術、戦術論ではなく、種々の分野が含まれている。

これは1964年の3月14日にチェコスロバキアのプラハで行なわれたハンドボールに関するシンポジュームの発表要旨を紹介しようとするものである。5年近くも前のものであるので、いささか資料的に古い点もあるが、ハンドボールが多角的に研究されている状況は十分に伝えることができるし、我が国のハンドボール界でまだ手がつけられていない分野の論文も見られるので、大いに参考とすることができよう。

このシンポジュームは第5回世界男子7人制ハンドボール選手権大会に際して行なわれたものであり、企画はチェコスロバキア体育協会とチェコスロバキアハンドボール協会がたてたものであった。

参加者は82人のコーチおよびハンドボール関係者、56人の医事関係者、10人のジャーナリストであった。

チェコはもちろん、ソ連から12人、ドイツ民主主義共和国（東ドイツ）から6人、スウェーデンから4人、ユーゴースラビア、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）、ハンガリー、アラブ連邦共和国からそれぞれ3人、フランスとデンマークから2人ずつ、アメリカ合衆国スイス、ノルウェー、イスラエルから1人ずつと計42人のチェコ以外の諸国からの参加者があった。まさに世界的規模のシンポジュームであった。

発表は31項あり、その分野は非常に多岐にわたっている。

まず、それらの発表題目を列挙してみよう。

スバトプルク・ジャサレク（チェコ）「ハンドボール研究のための諸問題」

▽・ドラジール、K・コスナール、J・マテジュコーバ、J・ルール、L・バンク（チェコ）「チェコおよび国際選手の身体機能の状態」

ミロスラフ・クセラ、ミロス・マセク（チェコ）「少年ハンドボール選手の練習における医学的問題点」

ジリ・R・プロス（チェコ）「ハンドボール女子選手の婦人科学的側面」

V・セルマク（チェコ）「成人のスポーツにおけるトレーニングの医学的管理についての指針」

ジリナ・ホボルコーバ（チェコ）「機能面の強化とそれを実際に役立てるためのコーチと医事関係者の協同作業の形について」

フローデ・ヘンリクセン（デンマーク）「ハンドボールのサーキット・トレーニングの利点についての概要」

ジャロミール・ホラク（チェコ）「ハンドボール選手の〃自転車荷重機〃における能力および他競技選手との比較」

Z・ホルノフ（チェコ）「女子ハンドボール選手の心臓の大きさと形」

バクラフ・ゼレンカ（チェコ）「シーズン開始前における女子ハンドボール選手のステップテスト負荷後のEKGの変化」

クルト・ティッテル（西ドイツ）「病理学・形態学・予防医学的見地から見たハンドボールのスポーツ傷害について」

ジリ・ジェシコケ（チェコ）ハンドボール選手の慣性的傷害について」

A・アドルフソン（スウェーデン）「ハンドボール選手の転倒事故の危険度」

ジョセフ・カルニィー、ミロスラフ・クセラ、ヅデネク・スレガク（チェコ）「ハンドボール選手の腕の傷害について」

マルタ・ハジュコーバ（チェコ）「ハンドボールに於ける傷害の予防」

ウラディミール、サファリク（チェコ）「複雑な反射運動に於けるハンドボール・バスケットボール・バレーボール選手の傾向」

ジリ・ベジュマン（チェコ「ハンドボール競技の特殊性を考えた少年少女の体力増強」

アラン・コラリク（チェコ）「女子チームの体力増強」

カレル・ホスタレク（チェコ）「女子ハンドボールの体力増強の特殊性と問題点」

ジョセフ・グレグス（チェコ）「ハンドボールのレベル別に見た反応速度」

ベードリッヒ・ケーニッヒ（チェコ）「男子ハンドボール選の体力作りの目標」

ミロスラフ・グライヒ（チェコ）「試合前のキーパーの練習について」

V・S、コシンセフ（チェコ）「ゴールキーパーの戦術的な練習について」

オルドリッヒ・スパシール（チェコ）「7人制ハンドボールにおけるポスト・プレーヤーの練習とその特殊性」

L・シュミト（チェコ）「選手交替の問題点」

ミロスラフ・スカルダ（チェコ）「一線防禦の効用と、それに対する攻撃法の変化の可能性」

ジリ・レハフ（チェコ）「ハンドボールにおけるサイドの攻撃プレーヤーのスピードと基本的条件について」

バクラフ・ホルタ（チェコ）「種々の投法における生物学的原則」

フランティセク・ボジュティセク（チェコ）「ハンドボールのルールとレフェリの性格」

ズデネク・バブラ（チェコ）「ハンドボールのレフェリーに欠けているものについて」

ミロスラフ・クセラ（チェコ）「事故防止という観点よりみたレフェリーの行動について」

ミラン・レザンカ（チェコ）「ハンドボールルールの立ち遅れについて」

このいずれをとっても、今日のハンドボール界にとって重要な問題である。普及といった面をとりあげたもの、ハンドボール選手の体力を機能面から分析したもの、傷害防止を医学的に追求したものあるいはルール面からそれにアプローチしようとするもの、種々の技術的な問題等々、全く広い範囲からの研究・分析がなされている訳者の語学力では力及ばずになりそうな面が多くある。特に医学的な分野においては、どうも誤りを犯しそうである。できる限りの努力はしていくつもりはあるが、力足らずになる場合もでてこよう。また従来から行なってはいるが、雑誌という限られたスペースに掲載するため、必ずしも、全訳が可能ではない。むしろ抄訳をする場合が多くなることになりそうである。極力、原文に近く訳出するつもりではあるが、その点の御了承をあらかじめ得ておきたいと考える。

題名をざっと眺めただけでも、実に多くの分野の研究がなされていることが読者諸兄にもお判りいただけることと思う。

一つには、国が実際に多くの施設を作り、そこに充分な設備と人間を配していることが大きな理由であるが、それを盛りたて、使いこなしているのは関係者の情熱にほかならない。

このように多くの分野の基礎的な研究の上に、チェコの栄光はなりたっている。

日本ですぐ同様なことを企てることは現状から見てなかなか困難なことであろうが、できるところから手をつけて、多くの人々が参加できるようなシンポジュームないし、討論会が開かれるような機運が一日も早くおこることが望まれる。

それとともに関連分野に広く応援をもとめ、種々の基礎的データを集め、分析し、多角的な見地から、強化・普及をはかっていくべきであろう。

日本でも、ここに掲載されているような事項に関し、分析・研究をしていこうとする芽生えは見られはじめている。ただ、関心をもっている人々の数が少なく、個々人がバラバラの形で種々の統計が作られていて、それが分析・研究にまで高められていない恨みがある。

それと十分に関連分野との連絡がついていないために、一人よがりの意見になってしまっている点が見られる。

ここに掲載されている論文を見ても、かなりの部分を医事関係者によって占めている。日本では、ごく僅かな人しかそのような協力者を得ていない。

確に科学万能で割りきれない面もスポーツの世界には多いが、こうしたデーターを基礎にふまえての科学万能を排するのと、全然そういったデーターなしに排するのとでは、立場が大きく異ってこよう。

また傷害・病気をいかに予防するかにという点も重要なポイントになろう。単に体験のみから、そういう問題に対処するのではなく専門家の意見を基礎にした上での体験による対処の方向が望ましいものであることは云うまでもないことであろう。

このような関連分野の協力を求めることは、すぐにどうといっても、相手のあることでもあり、なかなか困難であろう。しかし、これも一歩協力者を増していく方向で各自が協力を重ねるより他に方法がなかろう。

それとともに、すぐに手をつけられる分野がある。

それは、競技の技術・戦術と審判に関することであろう。

各地でそれぞれ日頃努力していることを集って、ディスカッションすることによって新しい方法が生みだされることもあろう。

従来の講習会はともかくお説教拝聴の会におわっている。それを参加者全員がそれぞれ自分の立場で考え、感じている種々の問題をさらけだし、自由に討論する場が作られることが望ましい。

このような意味において5年前のチェコ球界はどうであったかどのような研究がなされていたかを知るのは非常に重要なことである

今回はそのシンポジュームについて訳出する前に、いくつかの問題を指摘した。次回からは逐一内容について触れていきたいと考えている。御愛読いただきたい。

技術リポート

女子選手のシュート力分析

～第9回全日本実業団選手権から～

北川　　浩（熊本）

今年の2月8日から12日まで横浜市で行われた第9回全日本実業団選手権の女子の部は、日本女子界のトップチームが勢揃いし、各試合とも見応えのある好ゲームを展開したが、今年も、この大会のシュート調査を試みてみた。

このデーターは、大洋デパートの主力として活躍し、前回の世界選手権代表にも選ばれ、昨年限りで第一線を退いた新保郁子さんとともに観戦しながらの調査であり、かってのトップスターの目に若手選手の活躍はどう映ったか。彼女が造りあげた記録を参考にして、後進の躍進のために役立てば幸いである。

×　×　×

期せずして昨年の大会と決勝リーグ出場チームは同じ顔ぶれとなった。

	シュート	得点	シュート率	昨年シュート率
大洋 3勝 0敗	73	27	0.369	0.257
田村 2 1	77	33	0.428	0.366
三菱 1 2	64	27	0.343	0.241
大崎 0 3	88	23	0.261	0.241
	302	105	0.347	0.287

昨年度に比較して3割以上の成績を残したチームが多く攻撃力がグンと伸びたことを物語る（新保）

シュートに運びこむ巧さは田村紡がズバ抜けているが、その割に苦戦している。大洋に1敗したことは特に考えねばならぬことが多いと思う。（北川）

次に、シュート率及び防禦率をみてみよう。

▽シュート率及び防禦率

	大洋	田村	三菱	大崎	計	シュート率
大洋（3—0）		24/11	26/ 6	23/10	73/27	0.369②
田村（2—1）	24/ 9		21/ 9	32/15	77/33	0.428①
三菱（1—2）	16/ 4	22/ 5		26/13	64/27	0.343③
大崎（0—3）	24/ 6	32/12	32/ 5		88/23	0.261④
計	64/19	78/28	79/20	81/38	302/105	
防禦率	0.281	0.358	0.253	0.345	平均	0.347

▽各チームのシュート配分

	30本台	20本台	10本台
大洋		3	
田村	1	2	
三菱		2	1
大崎	2	1	

大洋が平均した数値を示している。大崎は成功率が低い。三菱はこの大会やや動きにムラがあり精彩を欠いていたのがこの表でも判ろう。

▽各チームの得点の配分（対戦別）

	10—15	6—10	1—5
大洋	2	1	
田村	1	2	
三菱	1		2
大崎	1	1	1

前項のデーターと関連深いことが注目される。

▽被ったシュートと失点

	被シュート	失点	率
大洋	64	19	0.281
田村	78	28	0.358
三菱	79	20	0.253
大崎	81	38	0.345

大洋は他チームに比較してシュートチャンスを多く与えていない。

シュートと得点の表（前掲）をもういちど見れば判るが、被シュート・失点より多い積極的な攻撃を行っている。

大洋——攻撃法が多彩である。特にゴール前における最高チャンスであるフリースローの得点力は他チームに例がない。各チームの研究が必要といえよう。

田村——得点率はトップでありコンビネーションからのポイントは確実さがある。内容からしてすばらしいと思われる。

三菱——得点率は3割台である

▽シュート別からみた攻撃力

	大洋		田村		三菱		大崎		計	
ジャンプS	15/4	0.240	16/4	0.250	16/3	0.187	34/7	0.205	80/18	0.222
ランニングS	1/0				1/0				1/0	
スタンディングスナップ	13/2	0.153	19/6	0.153	15/3	02	10/1	0.1	57/12	0.228
フェントS	1/1		1/1		1/0		3/2	0.666	6/4	0.666
プロージョン	4/1	0.25	11/3	0.272	6/0		9/1	0.111	30/5	0.166
速攻	9/5	0.555	9/4	0.444	4/3	0.75	12/3	0.25	34/15	0.441
ポスト	4/3	0.78	10/8	0.8	9/6	0.666	6/7	0.857	30/23	0.766
フリースロー	22/7	0.363	5/3	0.6	6/1	0.166	9/2	0.222	42/13	0.309
7メートル	5/4	0.8	5/4	0.8	6/6	1.0	4/1	0.258	20/15	0.75
	73/27	0.368	77/33	0.428	63/22	0.348	88/23	0.261	301/105	0.348

が、シュート数を増せば、より以上の成績を得られると思う。

大崎――ジャンプシュート、スタンディングシュート、フリースロー、7メートルスローなど得点率は2割台に終はつている。

これでは相手チームのボールキープ時間が長く、得点チャンスを多く与えてしまうことになろう。(新保)

失点の実態を探る

大洋――4チームのうち、失点率はいちばん低く、防禦率はトップである。

田村――攻撃力はトップであるが、以前に比較して、(特に)ジャンプシュートからポストシュートの防禦力が低下している。

三菱――各シュートとも5点内におさえているが、全体的にシュートを許している。

大崎――失点率がいちばん高いジャンプシュート、ポストシュート、フリースロー(7Mスロー)の防禦法をもつと研究して欲しいディフェンスのコンビネーションということになろうか。(新保)

▽こうむったシュート(数)と失点(数字は下段がシュート)

自チーム名	大洋				田村				三菱				大崎				
相手名	田村	三菱	大崎	計	大洋	三菱	大崎	計	大洋	田村	大崎	計	大洋	田村	三菱	計	
ジャンプS	2 7	0 5	5 17	7 29	1 4	2 7	5 17	8 28	0 7	0 4	2 10	2 21	3 4	2 5	1 4	6 13	
ランニング				0				0				0	0	0 1	0	0 1	
スナップ	4 10	1 4	0 1	5 15	0 1	0 5	1 4	1 10	1 6	2 5	0 5	3 16	1 6	0 4	2 7	3 17	
フェント	0	0	1 1	1 1	1 1	0 1	1 1	2 3	0	1 1	0 1	1 2	0	0	0	0	
プロンジョン	0	0 1	0 1	0 2	0	0 2	1 4	1 6	1 1	1 3	0 4	2 8	0 3	2 8	0 3	2 14	
速攻	1 4	1 1	1 4	3 9	3 5	0	1 1	3 6	1 3	3 5	1 7	5 15	1 1	0	2 3	3 4	
ポスト	2 2	0	3 4	5 6	1 1	3 5	2 2	6 8	0 1	1 2	1 1	2 4	2 2	5 6	3 4	10 12	
フリースワー	0 1	1 4	0 3	1 8	2 9	0 2	1 2	3 13	2 7	0	1 4	3 11	3 6	3 4	0	6 10	
7メートル	0	1 1	1 3	2 4	3 3	0	0 1	3 4	1 1	1 1	0	2 2	0 1	3 4	5 5	8 10	
計	9 24	4 16	6 24	19 64	11 24	5 22	12 32	28 78	6 26	9 21	5 32	20 79	10 23	15 32	13 26	38 81	105 302

個人別シュート率をみる

大洋――米、下枝のシュート力向上が、次代をになう一つのポイントになると思う。

田村――伝統をうけつぐ渡辺信のポストプレーと最近には珍しい若林のロングシュート(スタンディングシュート)の力は、大いに期待がかけられよう。

三菱――姫野のバラエティに富んだ得点力は垂水(大洋)に4点差をつけてのトップ。今後いつそうの努力を望みたい。

また小田島の要所でのポイントは姫野の活躍に匹敵するものといえよう。

大崎――若手の貢献度が不足している感じ。

特に主力の負傷のための練習不足はチームにとって、大きな痛手になったようだ。各人の健康管理と同時にチームの健康管理が必要である。(新保)

× × ×

この調査に使用したシュート調査カルテの例として決勝・大洋デパート×田村紡戦の一部を次頁に掲げておこう。

(編集部注・調査カルテは全試合にわたってお送りいただきましたが、紙数の関係で1試合のみ掲載いたします。御了承下さい)

こうしてみてみると、やはり、大洋(熊本)の安定した力が浮きぼりされてくる。しかし、他の三者との間に決定的な差はなく、それ故に「4強時代」といった華やかなキャッチフレーズも生まれてくる

▽個人別シュート率

	大洋	田村	三菱	大崎	
15～5(ゴール数)	垂水 0.363 22/8 渡辺 0.5 14/7 枝尾 0.312 16/5	種村 0.529 17/7 小林 0.5 12/6 清水 0.75 8/6	姫野 0.428 28/12 小田島 0.833 6/5	早川 0.3 20/6 鈴木 0.437 16/7	
4～2	射場 0.333 9/3 米 0.333 6/2 下枝 0.666 3/2	渡辺好 0.28 14/4 渡辺信 0.333 12/4 水谷 0.25 8/2 若林 0.4 5/2	蓮見 0.333 12/2 江川 0.181 11/2	加藤 0.181 11/2 日向野 0.25 8/2 三浦 0.181 11/2	
1～0	島田 0 3/0	辻 0 1/0	鈴木 0.25 4/1 落合 0 2/0	中野 0.225 8/1 小林 0.2 5/1 栗林 0.5 2/1 寺尾 0.25 4/1 木幡 0 2/0 山崎 0 1/0	
計	77/27 0.369	77/33 0.428	63/22 0.348	88.23 0.261	

ハンドボール競技技術調査（ルーマニアスポーツ病院方式）

大洋デパート 11（4―6 / 7―3）9 田村紡

・大会名 第9回全日本実業団選手権最終日（女子決勝リーグ）
・期　日 昭和44・2・13　　・会　場 横浜文化体育館
・記録者 H・K

チーム名	大洋デパート（FP）									田村紡（FP）									
選手名	垂水	米	渡辺	射場	下枝	枝尾	三宅	田中	計	種村	渡辺好	水谷	小林	清水	甲村	吉開	渡辺信	若林	計
背番号	2	3	4	5	6	7	8	9		2	3	4	5	6	7	8	9	10	
ジャンプシュート ◎得点	0		1			0			1	2	2		0						2
ジャンプシュート ○不成功	1		2			1			4	4	0		1						7
ランニングシュート									0										0
スタンディングシュート スナップスロー	0								0	1	1		0				0	2	4
	1								1	3	2		1				1	3	10
フェントシュート				1					1										0
				1					1										
プロンジョンシュート 飛びこみ(低) 倒れこみ									0										0
速攻によって生じたシュート		0	2		1				3	0		0					1	0	1
		1	3		1				5	1		1					1	1	4
ポストプレーによって生じたシュート	1								1		1		1						2
	1								1		1		1						2
フリースローからのシュート	2			0		0			2	0									0
	5			3		1			9	1									1
7Mスロー	3								3										0
	3								3										
計	6	0	3	1	1	0	0	0	11	3	2	0	0	1	0	0	1	2	9
	11	1	5	4	1	2			23	9	5	1	2	1			2	4	24
備考																			

（注） フェントシュートは1：1の状況により相手を抜いた時。

のだろう。また、各チームの相手に対する研究心も旺盛でそうした内面的な努力は、数表には現れて来ない。奥行きの深い激斗が頂点のレベルアップにこれからもますます拍車をかけることだろう。（完）

年内に世界女子選手権（？）

【緊急速報】日本協会がこのほど得た情報によると、ＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）では、昨年末ソビエトで開催が予定され流会となった世界女子7人制選手権を今年11月または12月ソビエトで行うことに決めた模様である。

（注）5月25日現在、ＩＨＦから日本協会には公式の連絡はとどいていない。

7月5日に組合せ決定
全日本高校選手権

第20回全日本高校選手権は8月2日から7日までの6日間、群馬県富岡市の富岡高、富岡西小学校を会場にして開かれるが、大会事務局（富岡市富岡一四六〇、富岡市役所内）では、大会要綱を発表した。主な点は次のとおり

一、登録校数が男子30校以上、女子20校以上の都道府県及び群馬県はそれぞれ2チーム出場することができる。

一、一チームの人員は監督1名、主務1名、選手15名以内とする

一、参加申しこみは7月3日までに高体連ハンドボール部（東京都世田谷区成城町一一〇〇・都立世田谷工業高校内）及び大会事務局に必着で行われなければならない。

一、組み合せの抽せんは7月5日富岡市役所で行われる。

なお、8月1日午後4時から富岡高校同窓会館で「高体連ハンドボール部創立20周年記念式典」が開かれる予定。

復審制を徹底研究
―全日本審判員研修会開く―

日本協会と審判部（部長・安藤純光常務理事）では、5月22日から25日までの3日間、東京で「昭和44年度全日本大会審判員研修会」を開いた。

この研修会は、昨年初めて試みられ、好評を博したもので今年が2回目。参加者は百八名。

今年度の全日本各大会に審判員を担当する予定の全国各地の公認審判員を一堂に会し、審判思想―判定解釈の統一をはかろうというものである。

特に、今シーズンは史上初の「復審制」が採用され、各地の公式戦で順調に運行へ移されているとはいえ、いくつかの問題がおきている。

審判部では、この機会に、復審制に関する諸問題を徹底的に検討するため、参加者を4グループに分けた分科会では、昨年のようにテーマを細分せず、いっせいに「復審制問題」を討議した。

なお、24日には駒沢第一球技場で行われた第7回関東学生新人戦の各試合で、実技研修も行われた。【注・研修会の詳細は次号】

女子で真備が2連勝

～中国高校選手権～

下関中央工も連続の栄冠

ブロック高校選手権のトップを飾る第20回中国高校選手権は5月3、4日の両日松江南高球技場で開かれた。参加したのは中国五県の予選を勝ち抜いた男子16、女子15校。

男子は、山口勢が圧倒の強味をみせてベストフォアを独占するという活躍を示し、昨年度全日本高校優勝の下関中央工が安定した攻守で、下松工、岩国を退け2年連続5度目の優勝を飾った。山口代表の優勝はこれで9年連続14度目

女子は2連勝を狙う真備(岡山)と広島勢が順当に勝ち進んだ。

決勝は真備×山陽女(広島)となり、一進一退の攻防を展開したが、前半僅差で優位に立った真備が後半も余裕のある試合運びで制勝、昨年につづいて栄冠を飾った岡山代表の優勝は2年連続9度目

▽男子1回戦

下関中央工(山口) 16 (7-9, 9-7) 7 三原工(広島)
倉敷商(岡山) 25 (12-5, 13-5) 10 松江農(島根)
下松工(山口) 13 (3-3, 10-5) 8 呉工(広島)
浜田水産(島根) 12 (5-2, 7-6) 8 境港工(鳥取)
尾道(広島) 16 (7-7, 9-5) 12 松江工(島根)
岩国工(山口) 14 (8-8, 6-1) 9 津山工(岡山)
天城(岡山) 9 (4-1, 5-1) 2 境(鳥取)
岩国(広島) 23 (11-7, 12-5) 11 広(広島)

▽同準々決勝

下関中央工 23 (9-1, 14-4) 5 倉敷商
下松工 12 (8-1, 4-5) 6 浜田水産
岩国工 17 (9-6, 8-4) 10 尾道
岩国 15 (6-6, 9-7) 13 天城

▽同準決勝

下関中央工 12 (6-3, 6-4) 7 下松工
岩国 16 (8-7, 8-4) 11 岩国工

▽同決勝

下関中央工 24 (14-2, 10-12) 14 岩国

▽女子1回戦

高水(島根) 16 (5-1, 11-3) 4 呉豊栄(広島)
落合(岡山) 5 (2-4, 3-0) 4 宇部女(山口)
呉宮原(広島) 8 (4-2, 4-5) 7 浜田水産(島根)
徳山(山口) 17 (9-0, 8-3) 3 西大寺(鳥取)
広島一女商(広島) 18 (5-1, 13-2) 3 松江市女(島根)

▽同準々決勝

真備(岡山) 12 (8-4, 4-7) 11 高水
呉宮原 7 (2-3, 3-2 : 0-1, 2-1) 6 落合
広島一女商 9 (6-2, 3-4) 6 徳山
山陽女 9 (5-4, 4-1) 5 下関西

▽同準決勝

真備 15 (10-0, 5-2) 0 呉宮原
山陽女 5 (1-2, 3-2 : 0-0, 1-0) 4 広島一女商

▽同決勝

真備 8 (3-2, 5-4) 6 山陽女

各地の記録

長崎教員、延長の末 栄冠

第5回九州選手権は今年のブロック選手権のトップを切って5月10、11の両日長崎市営球技場に九州6県から男子12チームが参加してトーナメントで行われた。

2回戦で前回優勝の熊本クが敗れる波乱があり、決勝は、国体を控えてチーム力を強化した長崎教員と4度目の優勝を狙う熊本教員の間で争はれ、1点をめぐる大接戦となり18—18から延長。後半、長崎教員が貴重な決勝点をあげて初優勝、地元の声援に応えた。

この大会で熊本代表以外が優勝したのは初めてのことである。

▽1回戦（4試合）

小倉工OB(福岡) 21 (8-8, 13-4) 12 全長崎大(長崎)
熊本教員(熊本) 19 (9-8, 10-8) 16 佐世保ク(長崎)
菊池農高OB(熊本) 14 (6-3, 8-8) 11 海上自衛隊大村航空隊(長崎)
海上自衛隊第一航空群(鹿児島) 不戦勝 全宮崎(宮崎)

▽準々決勝

小倉工OB 28 (13-11, 15-8) 19 熊本ク(熊本)
熊本教員 11 (5-5, 6-5) 10 大分教員(大分)
長崎教員(長崎) 18 (7-5, 11-9) 14 海上自衛隊第一航空群
福岡教員ク(福岡) 27 (12-6, 15-2) 8 菊池農高OB

▽準決勝

熊本教員 17 (9-10, 8-4) 14 小倉工OB
長崎教員 14 (7-4, 7-6) 10 福岡教員ク

▽決勝

長崎教員 20 (8-9, 10-9 : 1-1, 1-0) 19 熊本教員

男子で木更津が進境

昭和学院が57得点

▼千葉県高校総体ハンドボール競技（5月・千葉東高）

▽男子準々決勝

小金 19-13 清水
国府台 16-10 鶴舞
木更津 24-4 鶴舞雪解沢
佐原 不戦勝 君津農杯

▽同準決勝

木更津 17-14 小金
佐原 17-14 国府台

▽決勝

木更津 27 (14-10, 13-6) 16 佐原

▽女子決勝リーグ

和洋附国府台 8-4 鶴舞
昭和学院 20-3 八千代
佐原女 37-1 和洋附国府台
昭和学院 39-0 鶴舞
佐原女 11-3 八千代
八千代 22-3 和洋附国府台
佐原女 31-0 鶴舞
昭和学院 57-0 和洋附国府台
八千代 26-1 鶴舞
昭和学院 15-1 佐原女

【順位】①昭和学院4戦全勝②佐原女3勝1敗③八千代④和洋附属国府台女⑤鶴舞

寝屋川ク、スターズ降す

▼第23回大阪府民体育祭ハンドボール競技（4月・大阪）

▽男子1部準々決勝
高津ク 棄権 THク
宗形製作所 24―10 寝屋川ク
三国丘ク 15―9 枚方ク
大阪イーグルス 18―16 桃蔭ク

▽同準決勝
宗形製作所 26―11 高津ク
大阪イーグルス 25―14 三国丘ク

▽同決勝
大阪イーグルス 12（3―5, 9―6）11 宗形製作所

▽男子2部準決勝
大山商会 17―15 岸和田ク
若鷲ク 棄権 北陽ク

▽同決勝
若鷲ク 26（10―6, 16―9）15 大山商会

▽女子準決勝（＝1回戦）
大阪スターズ 不戦勝 豊陵ク
寝屋川ク 9―6 大谷ク

▽同決勝
寝屋川ク 11（4―5, 7―5）10 大阪スターズ

伏見工、8度目の優勝

▼京都春季高校選手権（4月・乙訓高）

▽男子準々決勝
乙訓 12―11 嵯峨野
洛北 25―10 堀川
伏見工 20―4 洛東
洛星 14―1 塔南

▽同準決勝
乙訓 20―9 洛北
伏見工 5―3 洛星

▽同3位決定戦
洛星 10―5 洛北

▽同決勝
伏見工 8（5―4, 3―3）7 乙訓
伏見工は3年ぶり8度目の優勝

▽女子準々決勝
西京商 9―5 洛東
桃山 5―4 京都女
乙訓 8―6 精華
明徳商 2―2 塔南
抽せんで明徳商の勝ち

▽同準決勝
西京商 10―2 桃山
乙訓 6―3 明徳商

▽同3位決定戦
明徳商 6―1 桃山

▽同決勝
乙訓 6（5―1, 1―1）2 西京商
乙訓高は初優勝

接戦の十津川―生駒

▼奈良県春季高校選手権（4月・添上高）

▽男子準々決勝（3試合）
添上 20―5 奈良
生駒 24―7 桜井商
東大寺 13―8 畝傍

▽同準決勝
生駒 24―1 奈良高専
添上 19―5 東大寺

▽同決勝
添上 18（6―1, 12―4）5 生駒

▽女子準決勝（＝1回戦）
十津川 16―3 添上
生駒 18―1 桜井商

▽同決勝
十津川 8（6―3, 2―4）7 生駒

新進・マリスト学園勝つ
女子で菊池農敗る

▼熊本県高校選手権（4月・済々黌高）

▽男子準々決勝
マリスト 18―16 水俣
熊本 44―7 天草
済々黌 12―7 熊本一工
鎮西 11―9 九州学院

▽同準決勝
マリスト 18―16 熊本
済々黌 9―2 鎮西

▽同決勝
マリスト学園 12（8―5, 4―4）9 済々黌
マリスト学園高は初優勝

▽女子準々決勝
熊本市立 22―7 天草
水俣 26―4 尚絅
九州女学院 14―2 鹿本商工
菊池農 22―6 鎮西

▽同準決勝
熊本市立 10―8 水俣
九州女学院 9―5 菊池農

▽同決勝
九州女学院 12（5―4, 7―6）10 熊本市立
九州女学院高は初優勝

益田、男女優勝逸す

▼岐阜県高校春季大会（4月・加納高）

▽男子準々決勝
加納 19―2 大垣南
岐山 16―2 岐阜北
益田 29―7 岐阜東
不破 20―16 大垣農

▽同準決勝
岐山 7―5 不破
益田 7―6 加納

▽同3位決定戦
不破 6―4 加納

▽同決勝
益田 5（3―3, 2―0）3 岐山

▽女子準々決勝
高山 1―0 加納
本巣 6―1 羽島
益田 14―3 岐阜南
大垣南 不戦勝

▽同準決勝
大垣南 6―2 高山
益田 5―3 本巣

▽同3位決定戦
本巣 棄権 高山

▽同決勝
大垣南 9（3―4, 3―2, 3―1）7 益田

天城、接戦で津山工破る

▼第24回岡山県高校春季選手権（4月・津山商）

▽男子準々決勝
天城 18―5 関西
倉敷商 6―5 操山
津山工 10―7 児島
矢掛 13―5 倉敷工

▽同準決勝
天城 10―5 倉敷商
津山工 10―7 矢掛

▽同3位決定戦
倉敷商 11―8 矢掛

▽同決勝
天城 9（4―3, 5―4）7 津山工

▽女子準々決勝
真備 31―7 金川
井原 5―1 津山
落合 7―3 津山商
西大寺 12―3 青陵

▽同準決勝
真備 12―0 井原
落合 13―2 西大寺

▽同決勝
真備 14（5―3, 9―2）5 落合

一般は岡山大が大勝

▼岡山県一般男子春季選手権（4月・倉敷商）

▽1回戦（1試合）
岡山大 20―11 全倉敷

▽決勝
岡山大 43（17―6, 26―3）9 関西OB

▽オープン試合
岡工OB 27−17 関西OB

山口は教員団が制す

▼山口県一般春季選手権（4月・山口高）＝男子のみ
▽準々決勝
山口教員団 30−17 外郎ク
出光徳山 24−16 陸上自衛隊
徳山ク 29−18 山口大
武田薬品光 23−17 東洋ソーダ
▽準決勝
山口教員団 16−13 出光徳山
徳山ク 28−18 武田薬品光
▽決勝
山口教員団 18（6−9、12−8）17 徳山ク

丸善石油、逆転勝ち

▼和歌山県春季選手権（5月・打田町）
▽男子準々決勝
丸善石油 12−6 県和歌山商
住友金属 11−6 御坊商工
新宮高 11−8 那賀高
和商ク 21−18 教員ク
▽同準決勝
和商ク 20−13 新宮高
丸善石油 16−10 住友金属
▽同決勝
丸善石油 14（6−7、8−5）12 和商ク
▽女子1回戦（1試合）
粉河高 17−0 県和歌山商
▽同2回戦（1試合）
御坊商工 13−9 粉河高
▽同決勝
貴和高 7（6−2、1−2）4 御坊商工
▽中学男子決勝
岩倉 13−7 打田
▽同女子決勝リーグ
岩出 10−3 粉河
打田 8−4 岩出
打田 11−3 粉河
【順位】①打田②岩出③粉河

塩山商と日川勝つ

▼山梨県高校総体ハンドボール（5月・和田町）
▽男子準々決勝
塩山商 32−2 峡北
園芸 11−10 甲府南
甲府工 8−7 日川
明誠 19−7 甲府商
▽同準決勝
塩山商 18−6 園芸
甲府工 11−4 明誠
▽同3位決定戦
明誠 22−10 園芸
▽同決勝
塩山商 16（9−1、7−5）6 甲府工
▽女子準々決勝
山梨 11−1 園芸
日川 17−3 甲府商
第一商 10−2 峡北
甲府二 6−3 塩山商
▽同準決勝
日川 7−4 山梨
甲府二 9−4 第一商
▽同3位決定戦
山梨 6−1 第一商
▽同決勝
日川 9（5−4、4−4）8 甲府二

やばねスポーツ、デビュー

▼第23回静岡県スポーツ祭ハンドボール（5月・清水商）
▽男子準決勝
清商ク 15−8 蒲原ク
やばねスポーツ 11−10 清水橘ク
▽同決勝
やばねスポーツ 18−11 清商ク
▽女子準決勝
二俣ク 8−1 清商ク
城北ク 18−2 浜南ク
▽同決勝
城北ク 9−6 二俣ク

兵庫協会理事長に藤原氏

兵庫協会では新役員を次のように発表した。

▽会長 滝川慶作▽副会長 大原靖男、増岡茂義 ▽理事長藤原豊（兼・県高体連主任）▽事務局担当理事北山隆、畑憲作

石川協会は若山氏

石川協会では新役員を次のように発表した。

▽会長 油谷外郷▽副会長 中川庄一、林恭造、三ッ村政一、赤井勇、川崎政雄▽理事長 若山博▽審判担当常任理事、宮川栄一、中村博、村井輝郎、伊藤義直、富祐彬

山口理事長には柳井氏

山口協会理事長に、柳井文治氏（下松工）が新任、藤田信義前理事長は副会長となった。

なお、事務局はこれまでどおり山口市糸米、山口高校気付（責任者、光永教之理事）

徳島協会の新役員

徳島協会は今年度新役員を次のように発表した。

▽会長 立川和雄（立川石油）▽副会長 斎藤明、大塚俊秀▽理事長 田村忠（池田高）▽副理事長 前田誠之助

千葉協会役員

千葉協会では新役員を次のように発表した。

▽会長 安田敬一▽副会長 浮谷貞雄、宮本酉嗣▽理事長 猪股俊二▽常任理事 長谷川仟、本間誠章、北原紀孝、渡辺二三郎、根本芝男、日根野寛、松本滋

「各地の記録」欄への寄稿を歓迎します。

市大会以上の公式戦記録をお寄せ下さい。用紙自由。

〆切日は特に設けませんが紙面の関係で原稿を短かくする場合があります。

編集後記

○……去る日、今年度初の編集委員会を開いた。委員会といっても真夜中に近い印刷所の校正室の片すみで藤本・杉山の〝対談〟である。

改めて本誌の編集、発行をおおせつかったわれわれが、このあとどう運営していくか。

多くの読者のかたから強く要望されているのは、技術関係の原稿量をふやすこと、写真をふんだんにすること、地方ニュースの広範囲な取材といった点である。

この任期中、これらの御希望を必ず実現したいと思う。

○……別掲（3頁）のように紙上討論の場を設けた。

全日本男子が、ルーマニアで試錬の毎日を送っているのに、われわれも負けてはいられない。

皆さんも、本誌上でハンドボールへの情熱と意気を存分に発散させて下さい。

○……今月号から新連載の「ヨーロッパ技術の研究」は興味深い記事となろう。

国内の研究者、指導者からもリポートがどしどし送られることを期待したい。

○……ところで、われわれと一緒にこの雑誌を造ろう、という若い人材を求めています。編集部まで御一報下されば幸です。

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第六十四号
昭和四十年六月[illegible] 第三種郵便物認可
昭和四十四年五月二十五日印刷 昭和四十四年六月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
（東京都渋谷区神南町二五 電話 大代表(467)三一一一 振替東京五八三四八番）
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円（年間購読11回・千二百円）